

未来の京都創造研究会報告書

～地域主権時代のモデル都市を目指して～

（別冊）

平成 2 1 年 8 月

未来の京都創造研究会

目 次

はじめに

第 1 章 研究会の取組	1
1-1 研究会の目的と構成	2
（1）設置目的	2
（2）委員構成	2
（3）研究会の特徴	2
1-2 研究経緯	4
（1）研究会及び部会の開催	4
第 2 章 重点戦略に関する研究会の提案	9
2-1 重点戦略の考え方	10
（1）重点戦略の方向	10
（2）重点戦略の記載方針	10
2-2 京都の未来像と重点戦略の構成	12
2-3 重点戦略案	13
Dユニット提案「U24 を多世代交流の懸け橋に～ライフスタイルの仕組みづくり～」	13
Cユニット提案「広がる共助，変わる公助～ジリキが育てる心地いい京都流コミュニティ～」	29
Bユニット提案「京スタイル したはる？」	35
Aユニット提案「人々が交流し，創造する都市の形成による京都市の活性化」	49
2-4 重点戦略案と各種計画の関係	57
（1）現行基本計画と重点戦略案の関係	57
（2）主な分野別ビジョン・計画と重点戦略案の関係	60
参考資料	6 1
参考資料 1 市民聞きとりアンケートの概要	62
参考資料 2 次期京都市基本計画策定支援チームによる「プロジェクトベース」 に基づく重点戦略の検討	70

はじめに

～新進気鋭の若手研究者と京都市若手行政職員のコラボレーションによる未来像と重点戦略の提言～

「未来の京都創造研究会」は、平成20年10月、大学のまち京都ならではの新進気鋭の若手研究者を中心に構成される研究会として設置され、柔軟な発想により次期京都市基本計画の策定の在り方や目指すべき未来像及び取組の方向などについて検討を進めてきた。

また、研究会の活動等を支援するため、公募に応じた若手行政職員を中心とする「次期基本計画策定支援チーム」が設置され、市民の生の声を直接聴く「市民聞きとりアンケート」の実施を皮切りに、基本計画に盛り込むべき重点戦略の検討等に取り組んできた。

本別冊は、こうした若手研究者と若手行政職員のコラボレーションによる活動の経過と主に重点戦略に関する研究成果について、自由なアイデアを含めて取りまとめたものである。

もとより、さらに検討を深めるべき課題は多く残されているが、今回の研究会で採った手法は行政内部だけでなく、外部との協働により提案するという新しい作り方である。その結果、分野横断的な視点や京都へのこだわり、従来の行政の縦割りを壊す方向性が随所に盛り込まれ、また、行政だけでなく、協働、共汗により多様な主体が実行するという戦略の方向性が示されている。

これらが今後の基本計画策定における実り豊かな議論のための参考資料として有効に活用されることを願うものである。

第 1 章 研究会の取組

1-1 研究会の目的と構成

(1) 設置目的

京都市では、地域主権の時代をリードし、京都の未来を切り開く新しい住民自治を実現するため、市民との「共汗」と政策の「融合」により、厳しい財政状況の中にあっても効率的・戦略的な行政運営を可能とする新たな基本計画の策定に取り組んでいる。

計画策定に当たり、柔軟な発想によって同計画の枠組みや策定手法等の基本的な在り方を議論し、必要となる素材を作成するため、「未来の京都創造研究会」が設置された。

本研究会が作成すべき具体的な素材としては、京都市から次の3点が提示された。

- ① 策定方針（基本計画の枠組みと策定手法）の案
- ② 政策課題の抽出とその解決策の方向性の案
- ③ 重点施策等の案

(2) 委員構成

研究会は、様々な専門分野の視点から幅広くかつ柔軟な議論を行うため、新川達郎同志社大学大学院総合政策科学研究科教授を座長として、大学のまち京都ならではの次代を担う30歳代から40歳代の各分野で活躍している新進気鋭の若手研究者11名で構成されたものである。

(3) 研究会の特徴

① 検討の初期段階から研究会が活動

研究会は、行政が現状認識を示して政策課題を探り、テーマを設定するような従来型のものではなく、検討の初期段階から自ら研究活動のテーマを定め、主体的な研究活動を進めた。また、分野毎の検討部会を設けて議論を深るなど、運営方法についても独自に工夫を行った。

② 分野横断的な「融合」の観点から議論

縦割りを排した分野横断的な視点から、環境や福祉、まちづくりなどの様々な専門分野での最先端の知識を「融合」することにより、大きな転換期にある京都市の未来にとって最適な計画の在り方や政策課題と解決策の案の提案を行った。

また、検討を深めるため、研究会に「都市部会」と「生活・地域部会」を設けたが、座長及び各部会長を除くすべての委員が両方の部会に所属することで、専門分野の異なる委員間の融合的な議論を行った。

③ 公募職員等の本市職員が参画

公募職員から成る「次期基本計画策定支援チーム」が、委員との議論やユニット活動に参加するなど、積極的に研究会の活動に参画した。

前述の都市部会に対応してAとB、生活・地域部会に対応してCとDの計4つのユニットを編成し、研究会委員と職員のコラボレーションにより未来像に対応した重点戦略案の検討を進めた。

■ 未来の京都創造研究会 部会別・ユニット別名簿

生活・地域部会

(ユニットC) 13名

(委員) 4名

乾明紀, 神吉紀世子, 空閑浩人, 平井康宏

(PTメンバー) 9名

今富僚二(文化市民局)
小泉進(環境政策局)
稲田和久(中京区役所)
藤本清敏(人事委員会事務局)
木下知子(右京区役所)
西村悠(消防局)
石田大二郎(都市計画局)
岸根郁朗(下京区役所)
藤田麻以子(産業観光局)

(検討の方向性)

近年の人間関係, 社会関係の在り方を踏まえ, 新たな地縁の共同体(自治会などの地域コミュニティ)の活性化戦略を検討

(ユニットD) 11名

(委員) 5名

岡本晴美, 大山泰宏, 松中亮治,
金武創, 辻田素子

(PTメンバー) 6名

高橋慶行(交通局)
佐藤則之(教育委員会事務局)(※)
櫻木友貴(上下水道局)
鹿村佳代(都市計画局)
木ノ切芳仁(上下水道局)
松本高宜(教育委員会事務局)(※)

(検討の方向性)

子ども, 若者, お年寄りなどの対象者間のつながりを見つつ, 分野横断的で京都らしさを持つ施策展開の方策を検討

未来の京都創造研究会 委員 (12名)

座長: 新川達郎
同志社大学大学院
総合政策科学研究科教授

「生活・地域」部会長: 秋月謙吾
京都大学公共政策大学院教授

「都市」部会長: リム・ボン
立命館大学産業社会学部
現代社会学科教授

空閑浩人
同志社大学社会学部
社会福祉学科教授

岡本晴美
佛教大学社会学部
社会福祉学科准教授

乾明紀
京都造形芸術大学芸術学部
准教授

大山泰宏
京都大学大学院教育学研究科
准教授

松中亮治
京都大学大学院工学研究科
准教授

平井康宏
京都大学大学院工学研究科
准教授

神吉紀世子
京都大学大学院工学研究科
准教授

金武創
京都橘大学現代ビジネス学部
准教授

辻田素子
龍谷大学経済学部
准教授

都市部会

(ユニットA) 14名

(委員) 4名

乾明紀, 金武創, 神吉紀世子, 辻田素子

(PTメンバー) 10名

牧澤憲(西京区役所)
枳尾恵梨子(建設局)
木村公則(総合企画局)(※)
飯尾貴之(交通局)
齋藤正利(建設局)(※)
古川辰也(文化市民局)
山本学義(産業観光局)
来海賢一(都市計画局)
馬場直子(上京区役所)
天辰公彦(上下水道局)

(検討の方向性)

新旧の文化など京都の魅力を生かした新たな産業を創出する戦略を検討

(ユニットB) 10名

(委員) 5名

大山泰宏, 岡本晴美, 空閑浩人,
平井康宏, 松中亮治

(PTメンバー) 5名

林正道(保健福祉局)
西山正志(都市計画局)(※)
中村和久(消防局)
松本康孝(環境政策局)
吉村智佳(保健福祉局)

(検討の方向性)

環境, 観光, 交通の3つの観点をつなぎ合わせた戦略を検討

※ 平成21年4月まで

1-2 研究経緯

(1) 研究会及び部会の開催

① 基本計画の在り方の検討（第1回及び第2回研究会）

第1回及び第2回研究会では、主に次期基本計画の在り方について検討した。第1回では京都市におけるこれまでの基本計画の変遷や新川座長論文「自治体計画行政の現状と課題」を素材として、基本計画の今日的な在り方について意見交換を行った。

その議論を受けて、第2回では、「戦略的かつ簡潔・明瞭な計画」、「市民との協働・共汗により策定・推進する計画」、「柔軟に進化（深化）する計画」等をキーワードとして、基本計画策定の在り方と方向性について検討を深めた。

なお、研究会の設立に先立ち、京都市若手公募職員による次期基本計画策定支援チームが立ち上げられた。その最初の活動として、新採職員144名とともに、実際に市民の中に飛び込み、生の声をお伺いする「市民聞きとりアンケート」が実施され、その成果は、第2回研究会へ報告された（巻末参考資料1参照）。

② 未来像の検討及び部会・ユニットの立ち上げ（第3回研究会）

第3回研究会では前2回の議論を受けた基本計画の在り方について一定のとりまとめを行った。また、次期基本計画が目指すべき4つの未来像を仮置きするとともに、未来像に基づく重点戦略の検討を進めるため、「都市部会」及び「生活・地域部会」の設置を決めた。

また、別途、支援チーム職員を対象として、大山委員を講師とした「プロジェクトベースド」という考え方（課題解決に向けた実践的方法論）に関する研修を実施した（巻末参考資料2参照）。支援チーム職員は、この方法論を学びながらチーム議論を重ね、重点戦略案検討の皮切りとすべく15の「取組方策メニュー」（巻末参考資料2参照）を作成し、第3回研究会において報告した。

③ 都市部会及び生活・地域部会と4つのユニットの立ち上げ

第1回都市部会及び生活・地域部会では、研究会委員及び次期基本計画策定支援チームによる取組方策メニューを素材として、ワークショップ手法により融合的な観点から重点戦略の方向付けについて議論を行った。また、研究テーマをさらに深堀するため、部会のテーマに対応したA、B、C、Dの4つのユニットを設け、その後、次期基本計画策定支援チームの若手職員と研究会委員によるコラボレーションによる重点戦略案の検討を進めた。

各ユニットでは、若手職員と研究会委員のディスカッションや、研究テーマに関連する企業へのヒアリング、「京都市未来まちづくり100人委員会」との意見交換など多彩な活動を重ねる中で、重点戦略案を練り上げた。

④ 策定方針のとりまとめと重点戦略案のブラッシュアップ

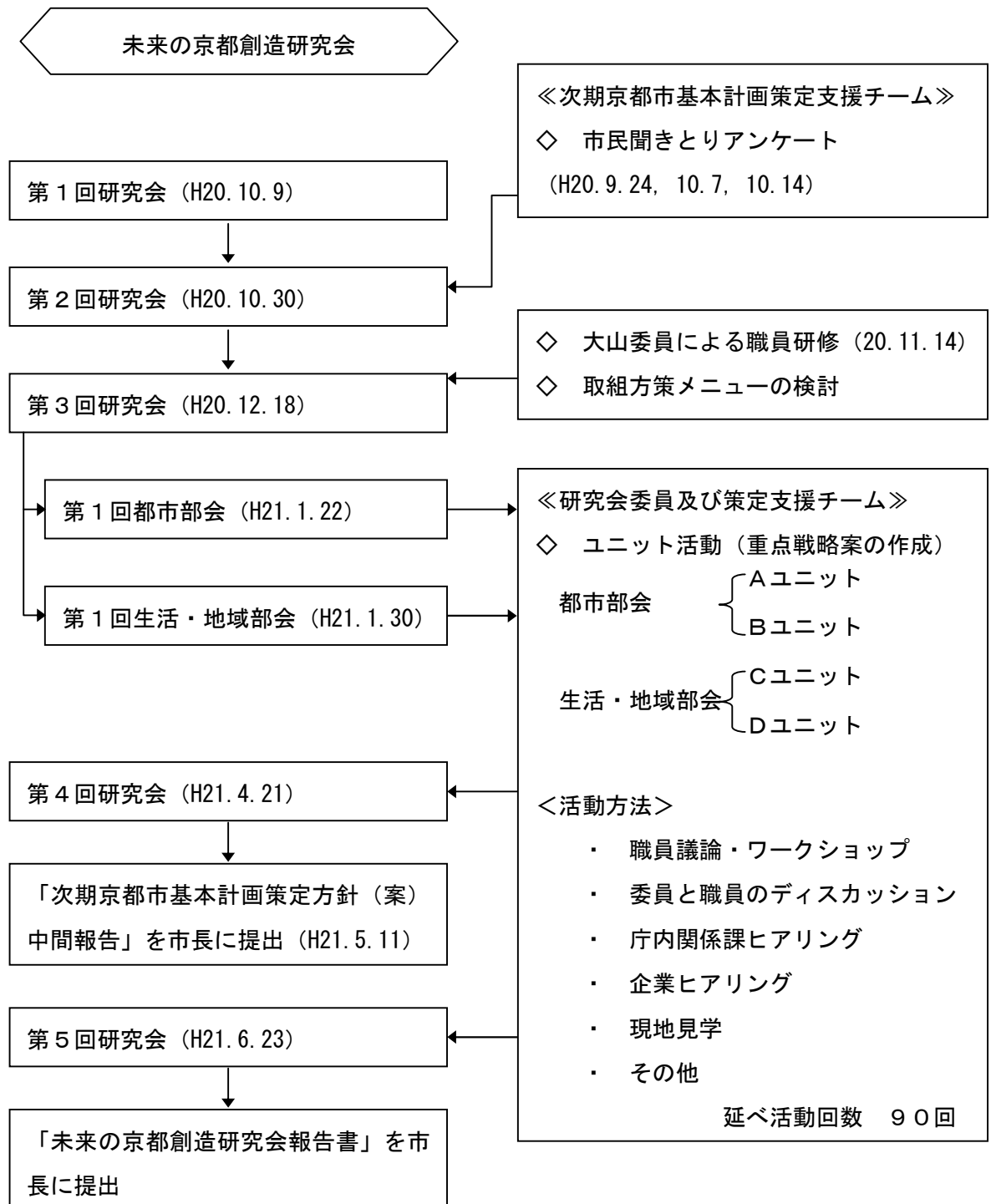
第4回研究会では、それまでの検討の中間報告として、「次期京都市基本計画策定方針（案）中間報告」が確認されるとともに、各ユニットからも重点戦略案についての中間報告を行っ

た。策定方針案については、「次期京都市基本計画策定方針（案）中間報告」としてとりまとめ、門川大作京都市長に報告を行った。

その後、第4回研究会での委員の指摘を踏まえた各ユニットによる重点戦略のブラッシュアップを行い、第5回（最終回）研究会においてその報告ととりまとめを行った。

そして、最終調整を経て「未来の京都創造研究会報告書」としてとりまとめた。

■ 未来の京都創造研究会及び次期基本計画策定支援チームの活動の流れ



■ 研究会及び部会の各回の開催概要

第1回研究会	
日 時	平成20年10月9日（木）午後7時00分～9時00分
場 所	こどもみらい館4階第1研修室
議 事	（1）研究会の役割と進め方について （2）京都市における基本計画（総合計画）の変遷について （3）自治体計画行政の現状と課題について （4）意見交換
配付資料	- 資料1 未来の京都創造研究会設置要綱 - 資料2 未来の京都創造研究会の「運営方針」（案） - 資料3 京都市における基本計画（総合計画）の変遷について - 資料4 自治体計画行政の現状と課題～今後の市町村総合計画について - 資料5 京都市基本計画策定のための市民アンケート調査について - 資料6 京都市の未来像メモについて（配付冊子） - 京都市基本計画 - 京都市基本計画点検結果報告書 - 京都未来まちづくりプラン（骨子）

第2回研究会	
日 時	平成20年10月30日（木）午後6時30分～8時30分
場 所	こどもみらい館4階第1研修室
議 事	（1）次期京都市基本計画策定方針（案）骨子案等について （2）市民聞きとりアンケートについて （3）京都の未来像について
配付資料	- 資料1 「次期京都市基本計画策定方針（案）骨子案」と「未来の京都創造研究会」の進め方について（案） - 資料2 市民聞きとりアンケート設問一覧 - 資料3 市民聞きとりアンケート分析結果 - 資料4 京都の未来像（検討資料） - 資料5 未来の京都創造研究会部会の運営について - 参考資料 - 京都市における市民参加の事例 - 神奈川県横浜市「東久保町 防災まちづくり計画」

第3回研究会	
日 時	平成20年12月18日（木）午後7時00分～9時30分
場 所	京都市消防庁舎7階作戦室
議 事	（1）「次期京都市基本計画策定方針（案）骨子案」と「未来の京都創造研究会」の進め方について （2）京都の未来像及び部会の運営について
配付資料	- 資料1 「次期京都市基本計画策定方針（案）骨子案」と「未来の京都創造研究会」の進め方について（案） - 資料2 京都の未来像と検討すべき取組方策（案） - 資料3 未来の京都創造研究会部会の運営について（案） - 参考資料 取組方策メニュー（次期京都市基本計画策定支援チーム作成）

第 1 回都市部会	
日 時	平成 21 年 1 月 22 日（木）午後 6 時 00 分～8 時 15 分
場 所	京都市交通局庁舎 3 階大会議室
議 事	（1）取組方策（重点戦略）の選定について （2）取組方策を検討する体制（ユニット）について
配付資料	- 資料 1 部会の目的，参加者，スケジュールについて - 資料 2 部会で取り扱う「ねがい」・「取組方策」について - 資料 3 「都市」部会の進め方（文書） - 資料 4 「都市」部会の進め方（図） 取組方策メニュー（委員及び次期京都市基本計画策定支援チーム作成）

第 1 回生活・地域部会	
日 時	平成 21 年 1 月 30 日（金）午前 10 時 00 分～12 時 00 分
場 所	キャンパスプラザ京都 2 階ホール
議 事	（1）取組方策（重点戦略）の選定について （2）取組方策を検討する体制（ユニット）について
配付資料	- 資料 1 部会の目的，参加者，スケジュールについて - 資料 2 部会で取り扱う「ねがい」・「取組方策」について - 資料 3 「生活・地域」部会の進め方（文書） - 資料 4 「生活・地域」部会の進め方（図） 取組方策メニュー（委員及び次期京都市基本計画策定支援チーム作成）

第 4 回研究会	
日 時	平成 21 年 4 月 21 日（火）午後 6 時 30 分～8 時 30 分
場 所	京都市消防庁舎 7 階作戦室
議 事	（1）「次期京都市基本計画策定方針（案）中間報告」（案）について （2）重点戦略について
配付資料	- 資料 1 次期京都市基本計画策定方針（案）中間報告（案）《概要》 - 資料 2 次期京都市基本計画策定方針（案）中間報告（案） - 資料 3 各ユニットの重点戦略について - 資料 4 「次期京都市基本計画策定方針（案）骨子案」と「未来の京都創造研究会」の進め方について（案） - 参考資料 現行基本計画・分野別計画と重点戦略案の関係について

第 5 回研究会	
日 時	平成 21 年 6 月 23 日（火）午後 6 時 30 分～9 時 20 分
場 所	京都市交通局庁舎 3 階大会議室
議 事	（1）重点戦略（案）について （2）未来の京都創造研究会報告（案）の構成等について
配付資料	- 資料 1 重点戦略（案）について - 資料 2 未来の京都創造研究会報告の構成等について（案） - 資料 2 別紙 京都の未来像（案）について

第 2 章 重点戦略に関する研究会の提案

2-1 重点戦略の考え方

(1) 重点戦略の方向

「重点戦略」の考え方は、研究会での検討を踏まえ、最終的には「未来の京都創造研究会報告書」（本冊）において次のようにまとめた。

● 京都の未来像と「融合」による重点戦略の設定

京都のポテンシャル（潜在的な強み・京都力）を活かす方向で優先順位を明確にした政策展開が可能になると同時に、市民が共汗できるような分かりやすい計画となるよう、概ね10年後の「京都の未来像」と、それを実現するために重要と思われる行政分野を横断した「融合」の視点によるいくつかの重点戦略を掲げることが重要である。

（略）

(2) 重点戦略の記載方針

上記の方向性に対応した重点戦略案を検討するため、大山委員の提案による「プロジェクトベース」の考え方に従い、重点戦略案の検討を進めた。

「プロジェクトベース」とは、領域別の課題設定による課題解決ではなく、複数領域にわたる具体的な課題を設定し、目標達成に向けた取組の課程で直面するさまざまな問題（課題）の解決を図っていくという方法論として整理される。特に教育分野では、「プロジェクトベース学習法」として、生徒自らの興味・関心、問題意識に沿ってプロジェクトを立ち上げ、課題追求を行う学習スタイルとしてアメリカで開発され、我が国にも導入が試みられている。

この考え方を踏まえながら、ユニットごとに京都市が目指すべき未来像とその実現に向けた重点戦略案について、焦点を当てるべきテーマと方向を議論し、次に示すフォーマットに従って、骨子を作成した。

■ 重点戦略骨子として記載する事項とフォーマット

《重点戦略骨子に記載すべき事項》

- ◇実態（現状）：戦略の対象となる事項やその背景の現状・問題点
- ◇目標：未来像をより具体的に示した目標（指標）
- ◇条件（京都の強み、京都力）：目標を実現するうえで活用すべき既存の諸条件
- ◇主体：目標を実現するうえでの中心的な主体と連携すべき主体
- ◇方略：目標を実現するための具体的な取組（施策、事業、市民の取組）

《重点戦略骨子のフォーマット》

重点戦略 ○○○○		○○ユニットからの提案	
ねがい（未来像） 京都の強みを生かして都市の活力を高める ～文化力を磨き、多面的に活用～ ○ 高い文化力が新たな価値を世界に発信する ○ 観光と交流がチャレンジを育む		【重点戦略の基本的な考え方】 京都の伝統を新しい活性化に生かすことが重要であり、資源や人材を掘り起こし、・・・・・・・・・・。そのため、次の重点戦略を設定する。	
《概要》 写真等	《実態》 	《目標》 《条件》 《主体》	《方略》 1 2 3 4 5

■ 重点戦略の特徴

基本的な戦略提案の前提として、（１）分野横断的な「融合」型とすること、（２）市民と行政の協働による「共汗」の考え方がある。提案された重点戦略は、基本的な前提の上に立って、さらにいくつかの共通する特徴を持っている。

第１に、新しい視点で戦略を考える、あるいは、発想の転換があることが大きな特徴である。従来の行政サービスありきの発想ではなく、市民やその生活の中から課題を解決する方策を探ろうとしている。

第２に、第１の視点から発するのであるが、市民やその活動、そして日常生活が本来持っている意味に着目して、それらを戦略の対象とするのではなく、方略（目的達成のための方法）として、位置付けようとしている点である。従来型の協働の視点ではなく、市政の主役が主役として位置付けられ、民主公従が貫かれている。

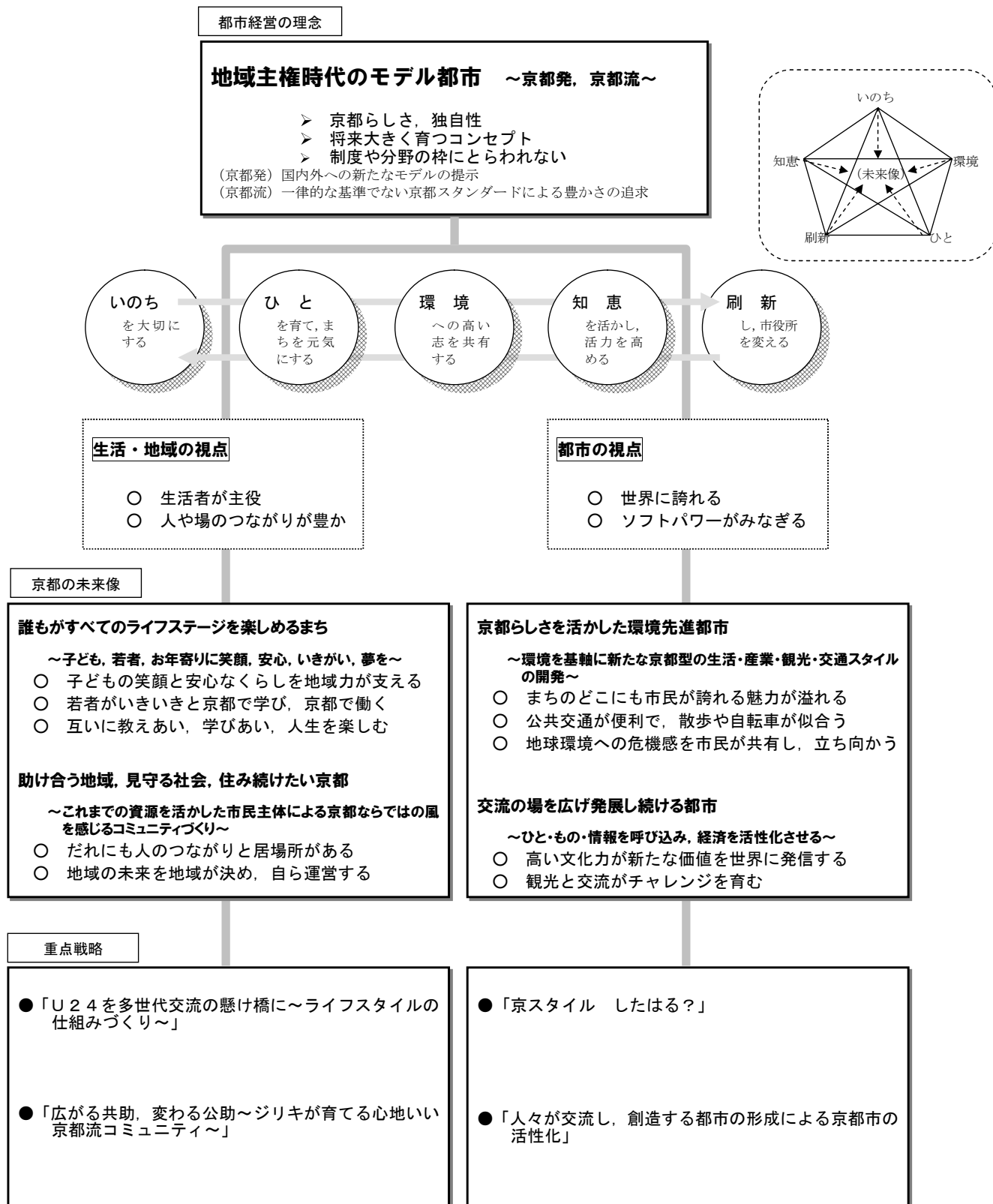
第３に、行政の役割については、市民生活を支援する役割を中心に構成されていることは当然であるが、それ以上に、市民の活動との相乗効果を展望して、行政活動を焦点化重点化しようとしているところに、特徴がある。

以上の諸点は、４つの戦略のそれぞれにおいて、必ずしも十分に展開されているわけではないが、少なくともその萌芽は見られるのである。

なお、戦略策定のプロセスについても注目しなければならない。必ずしも大成功というわけではないが、政策を考えるプロセスを全庁的に、しかもパートナーシップ型で試みることができた。そのことは、従来とは異なった政策形成プロセスであり、市役所全体がシンクタンク化し、公共サービスの構造的改革を不断に進めるべきという市民的な期待にこたえるものであり、特筆に値する。

2-2 京都の未来像と重点戦略の構成

都市経営の理念をベースとして、「生活・地域」と「都市」の2つの視点から、市民、企業と行政がともに目指す目標として4つの京都の未来像とその実現に向けた重点戦略を提案



2-3 重点戦略案

Dユニット提案

U24 を多世代交流の懸け橋に ～ライフスタイルの仕組みづくり～

未来の京都創造研究会委員 5名

岡本晴美（佛教大学社会福祉学部社会福祉学科准教授）
大山泰宏（京都大学大学院教育学研究科准教授）
松中亮治（京都大学大学院工学研究科准教授）
金武創（京都橘大学現代ビジネス学部准教授）
辻田素子（龍谷大学経済学部准教授）

次期京都市基本計画策定支援チーム 6名

高橋慶行（交通局）
佐藤則之（教育委員会事務局）（※）
櫻木友貴（上下水道局）
鹿村佳代（都市計画局）
木ノ切芳仁（上下水道局）
松本高宜（教育委員会事務局）（※）

※ 平成21年4月まで

戦略の特徴

市民生活を空間と時間の二つの軸で総合的にとらえている点が、まず特徴的である。ある時点での空間的な観点からのライフステージを豊かにする方法、そして、時間の経過に伴う個々のライフステージの展開の方向をふまえて方略を考えている。

次に、若者に焦点を当てているように見えながら、若年層を通じて、すべての世代との相互的な貢献に目を向けているところが特徴的である。今後の総合計画における戦略立案の参考となる視点である。

特に大学との関係については、単なる教育プログラムや社会貢献ではない、まち全体が大学化し大学がまち化するという展望を実現しようとしている点が注目点である。

重点戦略

U24 を多世代交流の懸け橋に ～ライフスタイルの仕組みづくり～

京都の未来像

誰もがすべてのライフステージを楽しめるまち
～子ども、若者、お年寄りに笑顔、安心、いきがい、夢を～

- 子どもの笑顔と安心な暮らしを地域力が支える
- 若者がいきいきと京都で学び、京都で働く
- 互いに教えあい、学びあい、人生を楽しむ

【重点戦略の基本的な考え方】

U24（0歳～24歳）の子ども（大学院生まで）を核とし、ライフステージに応じて、多世代をつなぐ京都らしい横断的な戦略を展開する。U24への参加・関わりを通じて、“京都に関わるすべての人たちが”京都を知り、学び、得た情報を発信していくことで、京都にさらなる愛着・関心を持つとともに、それを次世代に引き継いでいける仕組みをつくる。

この仕組みにより、一人ひとりが京都市民として活躍する居場所・役割を持ち、互いに育てあい、支えあい、認めあうことが当たり前になされる魅力あふれるまちを目指す。

《U24とは》

Under 24の略。0歳～24歳（大学院生までを想定）の子ども・若者を表す。

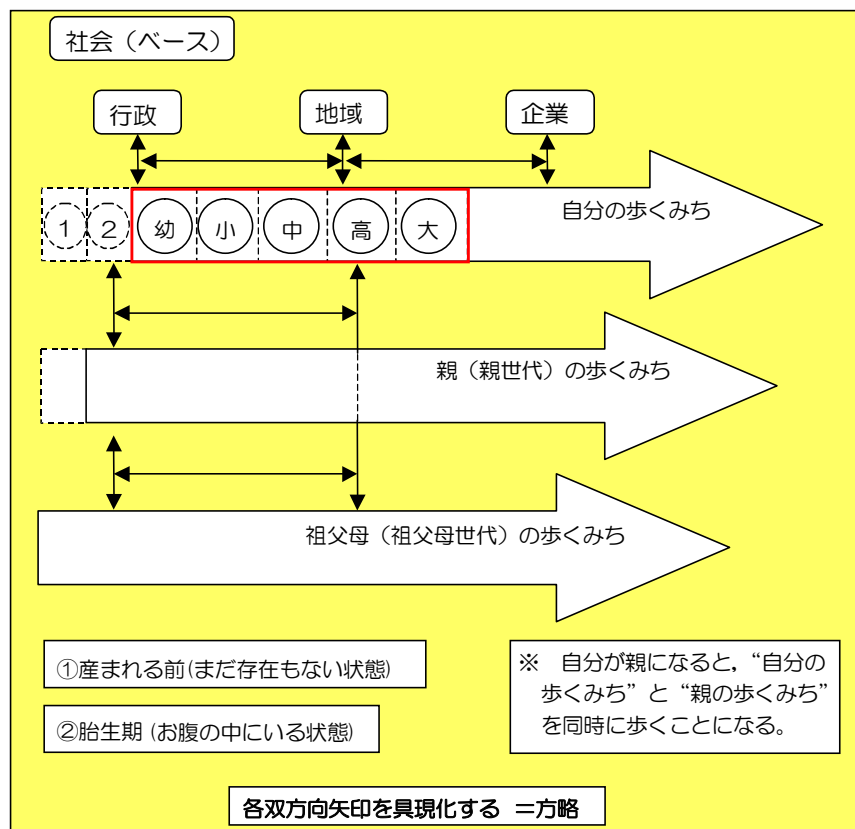
- U 6 : 6歳以下（乳幼児）
- U18 : 18歳以下（小・中・高校生）
- U24 : 24歳以下（大学生～大学院生）
- 全世代 : 全世代

《戦略検討に当たって》

- ① 世代間の関わりに着目し、互いに学び、成長できる社会環境を整える戦略を検討することとし、
- ② 個人個人のライフステージに着目し、ライフステージを左の4つに区分したうえで、現在取り組んでいる政策や取組事例の調査を行った。

《重点戦略イメージ》

他の世代や地域等と関わる取組を世代ごとに融合したもの



《現状》

- ・ 少子高齢化の進展，大学卒業後の転出により，次代の京都を担う若い力が失われつつある。
- ・ 高齢者が増加しているものの，元気な高齢者は多く，若い力をサポートすることを通して，生涯現役でいてほしい。多くの“居場所”をつくってほしい。
- ・ 若い世代へのサポート・関わりを核とするが，ライフステージごとに抱えている問題は異なるため，それぞれに応じた取組を検討する必要がある。

《目標》

○増加を図るもの

- ・ 出生率
- ・ 生産年齢人口
- ・ 20代の定住希望率
- ・ 子育て支援実施企業数
- ・ 高齢者のボランティア参加人数
- ・ “居場所”数
- ・ これまでの福祉・教育サービスの利用率

《条件》（資源）

- ・ 地域力
- ・ 大学，学生
- ・ これまでの福祉・教育サービス

《主体》

- ・ 市民，観光客
- ・ 企業，幼稚園・保育園，学校，地域コミュニティ，NPO，行政

《方略》⇒詳細別紙

1 U6子育てサポーターづくり

地域において気軽に子育ての相談・サポートが受けられるとともに，誰もが気軽にサポートできる環境づくりを進めることで，両親中心の子育てから，祖父母・地域を巻き込んだ子育てへと発展させる。

2 U18京育の実施

将来の京都を担う若者が，学校だけでなく，地域，企業と一体となっていく京都独自の教育（京育）を通して，京都に愛着や誇りを持つことができ，それによって得た力を次世代に引き継いでいく人材を育てる。

3 京都と大学・学生のWIN-WINの関係づくり

京都の学生が，京都独自の教育プログラム＝京育や，地域の活動などに関わることが当たり前となる仕組みをつくり，それが学生にとっても人生のプラスになる仕組みをつくる。

4 あらゆる世代の居場所づくり

誰もが気軽に利用できるスペースやコミュニティをつくり，自分が所属するライフステージ以外の取組にも積極的に参加できる仕組みをつくることで，自分の“居場所”が複数存在することを目指す。

《イチ押し策》

1 U6のためのシンボルロードづくり

保育園等の周りの道を，U6が安心・安全に歩ける道・多世代の行き交う道に創り変える。“みんな”がU6とその親世代と関わるきっかけをつくる。

2 U18ウォークラリー

小中高が合同授業で一緒にウォークラリーを実施。地域に根付く文化財に触れ，伝統行事・産業を体験することで，人や地域と関わりながら京都の魅力を知る。

3 京都地縁サイクル

京都の一人暮らし世帯が地域と触れ合う機会を設ける。将来的に子どもを授かったら京都に住みたい，度々京都に訪れたいと思わせるような地域についての思い出や地縁をつくり，京都やそこに住む人への愛着を持たせる。

4 京都市民サザエさんプロジェクト

「サザエさん」一家のような，多世代が自然と集まり団らんする家族や地域コミュニティを京都に増やすことを目的とした取組を行う。

誰もがすべてのライフステージを楽しめるまち ～子ども、若者、お年寄りに笑顔、安心、いきがい、夢を～

U6（6歳以下）		ライフステージ U18（7歳～18歳）		U24（大学生～大学院生）	
方略	1. U6子育てサポーターづくり	2. U18教育の実施	3. 京都と大学・学生のWIN-WINの関係づくり		
	自分の歩くみち	①U18ウォークラリー ②公共交通教育 ③他校との共同授業 ⑤ノーテレビ・ノーゲームデーの導入 ⑥観光アドバイザー体験	①京都地縁サイクル ②インタースHIPの強化 ③フリーペーパーの配布 ⑤京都ボラバイト		
	親世代の歩くみち	③父子手帳の交付 ⑦子育てグッズ交換会(子育てグッズフリーマーケット)の開催 ⑨新しいパパママの子育てふれあい体験の拡充	④こども大学・オーサージットの推進 ⑨京都で職場体験する修学旅行生募集	①京都地縁サイクル ②インタースHIPの強化 ⑤京都ボラバイト	
	祖父母世代の歩くみち	②「孫休」の創設 ③祖父母手帳の交付	④こども大学・オーサージットの推進	①京都地縁サイクル	
その他		④大学や商業施設等の一定規模以上の施設に保育所(託児所)の設置 ⑤子育て支援サポーターの一元化 ⑥観光子育てサポーターの設置	⑦こども相談総合案内 ⑧産地・添加物・栄養に配慮した店舗数UP ⑩京都教育都市宣言	④地域貢献活動必修化 ⑤京都ボラバイト ⑥住宅供給の整備 ⑦大学への保育所設置 ⑧大学の地域への開放	
4. あらゆる世代の居場所づくり		◆地域での居場所づくり ①京都市民サザエさんプロジェクト ・サザエさん宣言 ・サザエさんの家 ②まちの縁側		◆広報の工夫 ③送付封筒の活用 ④口コミの利用 ⑤名刺や名刺、切符などに施策名をさらっといれちゃおう作戦	

※ 各ライフステージにおいて、他世代と関わる取組を該当する世代に記載 ※ 各取組の番号は、方略の詳細資料に対応。斜体は再掲項目

重点戦略 U24を多世代交流の懸け橋に ～ライフサイクルの仕組みづくり～

『U24 多世代交流の懸け橋に～ライフスタイルの仕組みづくり～』
Dユニット提案



《方略の詳細》

＜方略1＞ U6子育てサポーターづくり

方略の未来像

地域において気軽に子育ての相談ができ、サポートを受けられるとともに、地域の誰もが気軽に子育てのサポートができる環境づくりを進めることで、両親中心の子育てから、祖父母・地域を巻き込んだ子育てへと発展させる。

現状と課題

- ・ 核家族化の進行などにより世帯構造が変化し、また、地域との繋がりが希薄化する中で、子育てに関して親族や近隣からの援助を受けにくいなど、夫婦の子育ての不安や負担が増大している（就学前児童の母親に子育てについての気持ちを聞いたところ、71%が「子どもがいると毎日楽しい」と回答したが、一方で、「不安、悩む」「生活や気持ちにゆとりがなくいらだつ」という回答も40%を超えている【新「京・こどもいきいきプラン」】）。
- ・ また、父親の育児休業取得率は1%程度であり、父親が子育てに関わりづらい理由として「残業が多く仕事を優先せざるを得ない」（約70%）、「子どもや家庭のことで休みを取ることに職場の理解を得にくい」（約40%）が挙げられる【新「京・こどもいきいきプラン」】。
- ・ しかし、京都市は就学前児童数に対する保育所定員割合が政令市で最も高く、待機児童も116人と3番目に少ないほか【京都市の政策方向に関する基礎資料、平成18年】、
- ・ 行政やNPOなども多くの子育て支援事業を行っている（例、ファミリーサポートセンターの活動件数：平成15年度4238件→平成20年度12405件、子育て支援活動いきいきセンター（つどいの広場）の数：平成19年度9箇所→平成21年度20箇所に増設予定【新「京・こどもいきいきプラン」】）。
- ・ ファミリーサポートセンターや子育てボランティアバンク等に登録しているのは退職した人や子育てが一段落した50代～70代が多く、シルバー人材センターなど既存の高齢者組織も多数あるなど、元気な高齢者が多い。
- ・ OK企業（O：おやじの／K：子育て参加に理解がある）と認定されているのは186社（京都未来まちづくりプラン→1000社）。
- ・ 行政やNPO法人、子育てサークルなどで数多くの子育て支援事業が行われているが、市民や地域に十分に認知および活用されているとは言えない。
- ・ 子育て支援事業の利用者の声としては、突発的な用事ができたときは土日祝日でも預けられる点が便利、1～2時間でも預かってもらえるのがよい、預ける理由を尋ねないなどの配慮などが挙げられる。
- ・ 子育てに関して、市・府・国に期待することは、①医療サービスの充実、②経済的負担の軽減、③就労環境の整備、④子どもの安心安全対策【新「京・こどもいきいきプラン」】。
- ・ 子育てをするうえで地域に期待することは、①子どもが事故や犯罪被害に巻き込まれないよう気を配りあうこと、②子ども危険な行為やいたずらを注意しあえること【新（京・こどもいきいきプラン）】。
- ・ 自主活動に当たって行政や地域に期待することは、①活動場所の提供（場所貸しなど）、②情報発信やPRなどに関する支援（掲示板の開放など）、③活動資金の助成（新「京・こどもいきいきプラン」）。
- ・ 「隣近所の人との付き合いは大切にしたい」と思っている市民は多い【次期京都市基本計画策定のためのアンケート調査】。
- ・ 市民活動に参加していない理由として、①活動できる時間がない、②活動についての情報が得られ

ないという意見が多く、その問題が解決すれば、市民活動に参加したいと考えている市民は多い【平成16年度第3回市政総合アンケート】。

- 父親・祖父母・地域（企業）の育児参加、既存の子育て支援事業の認知度および活用度を高める、若い世代のサポーターを増やす、活動場所・資金を提供することが重要である。
- まずは子育てに参加するきっかけづくりが重要。きっかけと継続性が人とのつながりと信頼を生み、子育てをしあえる、支えあえる関係が構築できると考えられる。

解決策

取組① U6のためのシンボルロードづくり<イチ押し策>

U6世代に関わる施設（保育園や幼稚園など）の周りの道を、“みんな”で特色のあるもの（フラワーロード、お絵かきロードなど）に自由にデザインし、子どもに「車に気をつけてね」と言わなくてよい安心・安全な道・多世代が行き交う道を創る。小・中・高・大学生や地域、企業、観光客が参加できる仕組みをつくり、「道は誰のもの？」と問いかけ、少なくともすべての道が自動車優先ではないことを再認識させる。

各地に小さなシンボルロードづくりが広がり、それぞれが完成していったら、次はシンボルロード同士をつなげるシンボルロードをつくることで、人と人とのつながりもより広がっていくことになる。いずれはすべてのシンボルロードがつながり、より多くの人とつながるようにしていく。

すべての世代がU6世代（と子育て世代）と気軽に接することができる機会を提供すると同時に、U6世代の安心安全な場所の確保・拡大、新しい京都の魅力や観光の形の創出など、さまざまな効果を生むことが期待できる。また、シンボルロードづくりは単発のイベントではなく、（維持・管理などを含め）継続的に行える・行うべきイベントなので、ライフステージが移っても参加でき、次代に引き継いでいける仕組みづくりのパイロット事業にもなりうる。

<新規>

取組② 孫休の創設

祖父母世代も、孫のために育児休暇を取得できる制度を創設する。

取組③ 父子（祖父母）手帳の交付

母子手帳の父親（祖父母）版。ただし、父親（祖父母）の子育て参加について、かゆいところに手が届くような情報（最新の子育て事情、子どもの叱り方など）や子どもの写真を張るページなどが載っている。

取組④ 大学や商業施設等の一定規模以上の施設に保育所（託児所）の設置

保育園・幼稚園以外で“みんなで子育て”を実施する場所（大学、スーパー、百貨店だけでなく空き店舗、空き教室なども活用）を創出する。子どもを安心して遊ばせられる環境を提供する。

取組⑤ 子育て支援のサポーターの一元化

ファミリーサポートセンターや子育てボランティアバンク、シルバー人材センターなどの子育て支援のサポーターを一元化することで、利用者にわかりやすい・使いやすいシステムにする。

取組⑥ 観光子育てサポーターの設置

観光業界と連携して、京都観光時に町家ステイとセットで近所の子育てをサポートすることなどを含めて“京都の生活を体験できる”ようにする。観光の新たな魅力を創出すると同時に、京都を子育てしやすいまちとして全国にアピールする。

＜従来の事業拡大＞

取組⑦ 子育てグッズ交換会（子育てグッズフリーマーケット）の開催

定期的に学区単位、行政区単位、全市単位で子育てグッズの交換会（フリーマーケット）を開催する。

取組⑧ 中高生と赤ちゃんふれあい交流事業の拡充

中高生がU6と触れ合う機会を全市的な取組として発展させる。保健体育の授業の一環で保育園や児童館などに出向いて、赤ちゃんとはふれあう機会をつくる。

取組⑨ 新しいパパママの子育てふれあい体験の拡充

新しくパパママになる人は、子育てに必要な知識を学び、体験できる機会を必ず得られるような環境をつくる。

すべての取組が個別に実施することができ、シンボルロードづくりにつながることもできると考えています。

＜方略2＞ U18京育の実施

方略の未来像

将来の京都を担う若者が、学校だけでなく、地域、企業と一体となっていく京都独自の教育（京育）を通して、京都に愛着や誇りを持つことができるとともに、京育によって得た力を次世代に引き継いでいくことのできる人材を育て、魅力ある学び場のまちとなる。

現状と課題

- ・ 学校施設の整備状況
ディサービスセンター3箇所 特別養護老人ホーム3箇所 児童館19館
学童保育所14箇所 学校ふれあいサロン138校 防災備蓄倉庫の設置54校
学校コミュニティプラザ14ゾーン（67校） 高齢者福祉施設7箇所
- ・ 生き方探求教育（キャリア教育）
自然体験やボランティア体験、インターンシップ等の社会体験、京都スチューデントシティ・ファイナンスパーク学習などの体験活動の推進と充実を図っている。受け入れ事業先の理解があり、事業所数は年々増加している。
- ・ 取組について知っている市民が少ない。
- ・ 各々の団体のネットワーク連携が希薄であるために成果が分散したままであり、世代ごとを対象とした連携をめざす。
- ・ 広報活動・啓発活動の一元化が必要
サービスの受け手ではなく、提供者が情報を整理し、必要なものをまとめて発信する必要がある。
- ・ ボランティアがもっと必要
ボランティアを当たり前に行っているという環境を作ることが大切
- ・ 子育てに関する取組や地域活動は、任意参加であり、必修・強制はできない。
- ・ 市民の意識は「隣近所との付き合いを大切にしたい」に8割が賛同していて、「地域の人々との交流は大切だと思う」9割と高い【次期京都市基本計画策定のためのアンケート調査】。

- ・ 学校運営協議会の設置 121校
- ・ 学校教育に望むことが多様化・複雑化している中、要望にこたえるため、市立高校9校では豊かな人間性・社会性を育むとともに、進路希望の実現を図るための教育活動を展開している。
- ・ 市民や行政が力を合わせて取り組む機会が十分ないと多くの市民が思っている。

解決策

取組① U18ウォークラリー＜イチ押し策＞

小中高が合同授業で一緒にウォークラリーを実施。地域に根付く文化財に触れ、伝統行事・産業を体験することで、人や地域と関わりながら京都の魅力を知る。

取組② 公共交通教育

市バス・地下鉄・自転車等の利用の仕方やメリットを定期的に教えることで、「歩くまち・京都」を子どもの時から学ぶ。市バスや地下鉄の車庫見学会などを通じて、より身近に接する機会も増やす。

取組③ 他校との共同授業

他都市でのホームステイを体験することで、生活習慣、歴史や文化の違いを学ぶ。
郷土に対する誇りや愛情を生む。

取組④ こども大学・オーサービジットの推進

小学生が大学で勉強したり、大学生と触れ合う機会を増やす。作家や芸術家などの特別講師によるユニークな事業を体験する。

取組⑤ ノーテレビ・ノーゲームデーの導入

教育の原点である家庭の教育力の向上をめざす。地域でのつながりや学びの時間をつくる。

取組⑥ 観光アドバイザー体験

学校教育に伝統産業・文化の実践講習や観光案内を行うカリキュラムを導入する。

取組⑦ こども相談総合案内

教育委員会、保健福祉局、区役所や関係機関・施設の情報発信の一元化

取組⑧ 産地・添加物・栄養に配慮した店舗数UP

京野菜などに小さい頃から親しむとともに、食育を促すことで、京都全体で栄養に気を使う人が増える。

取組⑨ 京都で職場体験をする修学旅行生募集

京都の伝統文化・産業を体験してもらう事で、京都の魅力を他都市の学生にアピールする。

取組⑩ 京都教育都市宣言（教育都市のイメージ・PR戦略）

「大学のまち」という強みを生かして、大学と小中高が連携することが当たり前環境をつくる。
【小中高の近くに大学がある→学力に力を入れている→子どもを育てやすい環境→教育に力を入れた世代が集まる】ように、京都は子育てや教育がしやすいまちであるとPRする。

＜方略3＞ 京都と大学・学生のWIN-WINの関係づくり

方略の未来像

京都の学生が、京都独自の教育プログラム＝京育や、地域の活動などに関わるのが当たり前となる仕組みをつくる。大学を全世代にとっての学びの場とし、京都の財産とする。

- ・ この仕組み自体が、京都市だけでなく、学生にとっても人生のプラスになるようなものであり、大学から京都に来た学生がそのまま京都に住み続けたいとなる環境を整える。
- ・ 大学は学生だけのものではなく、全世代のものとして、地域の人々の生涯学習の場、交流の場、遊び場、ともなるようにする。

現状と課題

- ・ 入学前に大学を選ぶ基準において、入試での入り易さに重きが置かれている。自分の人生なのでまずやりたいことがその大学にあるかどうかが重要。京都市は多くの大学を抱えているため、入試方式に関しては全国でも優位にあるはずである。
- ・ 京都に流入する学生は卒業と同時に京都から流出することが多い。
- ・ 京都という地域の良さに触れるきっかけがあると京都に住みたいと考える大学生は多い。
- ・ 居住期間が短い人を京都人として認めない傾向がある（3代住んだら京都人）。
- ・ 京都に興味があっても働き口が少ない。
- ・ 学生の定着や高齢者夫婦に適した小家族向けの住戸が不足している。
- ・ 大学と地域との間で、地域と関わるお互いのメリットを見つける。
- ・ 文化や自然等のまちの住みやすさ、人の温かさ、柔らかさが京都の魅力。
- ・ 「京都で」学生であることの特典が少ない。
- ・ 単位互換授業履修手続きの簡易化が必要。
- ・ 京カレッジの単発講座や無料講座が増加すると良い。
- ・ 生涯学習の利点についての市民認識が低い。
- ・ 単位互換授業や生涯学習科目での内容向上に努める仕組みが必要。
- ・ 大学からの接続の良さと単位互換授業受講率の高さとは必ずしも比例しない。大学内の単位互換授業に対する取組具合が受講率に大きく影響する。
- ・ 生涯学習では、定年後の男性層（60代以上）と子育て終了後の女性層（50代、60代以上）が、出願者数の65%を占めるキーパーソンとなっている。

解決策

取組① 京都地縁サイクル＜イチ押し策＞

京都には学生が多いが、地域に根差していないため、京都の良さを伝えきれずに転出してしまうケースが多い。一人暮らし世帯同士が触れ合う機会を多くすることで地域に愛着を持ってもらい、将来的に子どもを授かったら京都に住みたい、度々京都に訪れたいと思わせるような安心で愛着あるまちづくりを目指す。

地域の一人暮らし世帯が集まりやすい場所（定食屋やカフェ）を紹介したり、メッセージノートや地域活動のビラ等を置いておいたりする。「近所にこんな場所や活動があるんだ、こんな人が住んでいるんだ」と近所を知り仲良くなることで、地域に触れる機会を作る。マンション・アパートの大家さんや大学に協力してもらい、近所の一人暮らしの人が集まる箇所を示した地域マップや、その地域を転出する人から転入する人へ向けたメッセージやアドバイスを作成してもらう。

また、関西特有の寺社の定例市・祭や地蔵盆やお御輿、町内運動会や地域清掃の呼びかけを町内会だけでなく一人暮らし世帯にも行うことで、京都に触れる機会を設け、京都大学生生活だけでなく

地域についての思い出を作っていく。特に、学生は携帯やパソコンなどからの情報をよく見ているので、その点について強化する必要がある。

取組② インターンシップの強化

京都の企業は、学年・年齢に関係なく、京都の学生を常に受け入れられる体制を整える。京都にしかない伝統産業等を短期間で体験できるようなプログラムを取り入れることにより、京都で働くイメージづくりを手伝う。

例えば、京都には伝統産業が多いものの、その担い手は年々少なくなっている。これは、伝統産業の多くが若年時での弟子入り制をとっていること、仕事内容や収入や休日等の就職サイトでは現在当たり前に載っている情報が開示されておらず一歩踏み込みにくいという状況が一因だと思われる。舞妓になりたいが親に反対されている、真剣に興味があるので一度体験してみたいという学生のために伝統産業にもインターンシップを用意する。

また、京都市ではワコールや島津製作所、京都市近隣では京田辺市の椿本チェーンといった国内大手企業や、町の工務店・自転車屋などの中小企業がある。このような企業に、中高大学生に対してのインターンシップを行ってもらうことで、学生に進路を考えるきっかけにしてもらう。また、企業側、特に一般に馴染みの薄い商品製作をしているところは、自社の製品や名前を売り込むチャンスである。また、インターンシップに来た学生が企業コーディネーターとなって、今までに訪問した企業間での提携や技術交流を進めるよう義務付ける。

取組③ フリーペーパーの配布

文部科学省が実施している「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」を活用した大阪城南女子短大のミニコミ誌「大阪ほっとコミ」のように、学生が提案・発表し、それが活用される場を設けてやりがいを引き出す。

取組④ 地域貢献活動必修化

大学の授業で、地域貢献履修項目を必修化する。地域活動をポイント制にし、活動に参加すればその内容に応じてポイントがたまり、単位を付与することとする。1大学だけでなく、大学コンソーシアムを中心に、京都全体の大学で実施することで、いろんな大学・地域の人と繋がりが生まれ、学生にとって京都で暮らすことのきっかけづくりとなる。

取組⑤ 京都ボラバイト

ボランティア+アルバイト=ボラバイト。ボランティアをしたいけど、アルバイトする時間がないと困るという学生のために安価な給料でボランティア活動を行う。京都でしかできない京野菜づくりの手伝い等のボランティア活動を対象とする。

取組⑥ 住宅供給の整備

学生の定着率が高まった場合や世帯人数の減少が進むにつれ、少人数向けの住宅が不足するという問題が発生するので住宅供給を整備する。ただし、地域ごとに人口ピラミッドに偏りが出ないように、各地域での世帯数の年代制限を行う必要がある。また、京都市の各地域での特色分け（工業地域、商業地域等）を残したまま、どの地域に住もうとも、交通の便等に不公平のないよう配慮せねばならない。

取組⑦ 大学への保育所設置

生涯学習の場として子育て中の主婦なども大学を利用しやすいよう、大学内に託児所や保育所を設置する。

取組⑧ 大学の地域への開放

大学と小中高校及び地域との連携を深めるため、夜間のグラウンド開放や体験授業の受講を行う。地域活動の場や、生涯学習の場として大学を利用する。また、大学を身近に感じてもらうことで進路選択に京都の大学という意識付けを行う。

<方略4> あらゆる世代の居場所づくり

方略の未来像

誰もが気軽に利用できるスペース・コミュニティをつくり、自分が所属するライフステージ以外の取組にも積極的に参加できる仕組みをつくることで、自分の“居場所”が複数存在することを目指す。

現状と課題

- ・ 家族像の変化により、核家族や単独世帯が増加している【国勢調査「京都市の家族類型別一般世帯数（比率）の推移」】。また、御近所づきあいは希薄化しており、町内会・自治会への参加頻度も少なくなっている【内閣府「国民生活白書」（平成19年度版）】。
さらに、地域内でのつながりだけでなく家庭での親子のつながりも希薄化しており【「低年齢少年の生活と意識に関する調査の結果について」（平成19年3月）（内閣府）】、自分が孤独であると感じる日本の子どもは他国と比較すると突出して多い【自分が孤独であると回答した15歳の割合 内閣府「国民生活白書」（平成20年度版）】。人と人とのつながり自体が弱まっている。
- ・ 一方で、社会への貢献意識は高まっている【内閣府「国民生活白書」（平成19年度版）】。NPO法人数は年々増加し、今後も増加傾向は続くとみられている【京都市客観指標基礎データ】。
- ・ さまざまなNPO法人やボランティアの活動、地域でのサークル活動などがあるものの、市民にうまく情報提供がされておらず、認知度が低い【市民聞き取りアンケート（平成20年9月・10月に3回実施）】。予算に制限もあり、うまく広報できていないのが現状。フリーペーパーや一般の雑誌の特集記事、ロゴマークやシール、ロコミや市からの送付封筒の活用など、経費を抑えつつ大きなPR効果が得られるよう、広報の方法を工夫する必要がある。
- ・ 市民の活動拠点となる施設は、野外活動、教育、スポーツなど多くの分野にわたって設置されている【京都市ホームページ施設情報（一覧）】。
- ・ 一人暮らしの高齢者は増加している【内閣府「高齢社会白書」（平成20年度）】。
- ・ グループ活動に参加する高齢者が増加傾向にある【内閣府「高齢社会白書」（平成20年度版）】。
今後増加する高齢者に向けて、世代間交流活動に魅力を感じてもらい、参加してもらえるよう広報する必要がある。

解決策

地域での居場所づくり

取組① 京都市民サザエさんプロジェクト <イチ押し策>

○ サザエさん宣言

「サザエさん宣言」をする家族やグループを募集。「波平さん、フネさん、マスオさん、サザエさん、カツオくん、ワカメちゃん、タラちゃん」に当てはまる人物を揃え、申請する（男女問わない。性別が違ってても、一家またはグループの中で、それぞれの人物的な役割を果たしている人であればOK）。これ以外に「サザエさん宣言」ができる条件は、家族であれば毎日2時間は家族団ら

んの時間をもつ、家族揃って御飯を食べるなど。グループであれば、週数回団らんの時間を持ち、揃って御飯を食べる、レクリエーション活動をするなど。

「サザエさん宣言」が認定されれば、各種の割引サービスを受けられ、希望があれば「京都市の磯野家」として市民しんぶんなどで紹介され、市民しんぶん等の企画などの1コーナーを担当できるなどの特典がある。→広報の一環にもなる。

○ サザエさんの家

若者が気軽に立ち寄れる家を作る。そこは遊び場と居場所の役割を果たす。困ったときにアドバイスをくれる「波平さん」や何でも気軽に相談できる「フネさん」、一緒に話をしたり、遊んだりする「カツオくん」、「ワカメちゃん」のような人がいて、親や友人以外で相談できる存在となる。市内にサザエさんの家となる場所を作る（できるだけ既存のものを利用）。

サザエさんの家＝町家。掘りごたつでゆっくりと話せる雰囲気。京都ならではの遊び・料理・伝統文化などについての体験もできる。

取組② まちの縁側

かつて、まちのいたるところでごく自然に存在し、地域コミュニティの形成に重要な役割を果たした縁側の現代版。誰もが気軽に立ち寄れる交流サロンとして注目され始めている。

≪具体的事例≫

○ とねりこの家（京都市上京区）

コーポラティブハウスの組合員や町内会などの地域の人々、「上京区に『とねりこの家』をつくる会」の会員らの支援を受けながら、誰もが気軽に集い、交流する地域に開かれた福祉交流サロンづくりを目指す。高齢者、障害者、子どもたちなど社会的弱者と捉えられてきた人たちがまちの主人公となっていくような地域づくりを行うことを目的としている。従来のふれあいサロンとは異なり、補助金や対象者規定、日時などの制限に縛られないため、誰もがいつでも利用できるサロンとなる。

【事業内容】

- ・ 交流事業（高齢者と子どもの交流、子ども用図書・絵本コーナーの設置）
- ・ 健康・介護・住環境改善相談
- ・ 朝がゆをみんなでつくり食べる会の開催
- ・ 音楽会の開催

○ まちの縁側MOMO（名古屋市）

誰もが気軽に立ち寄れるサロン、ギャラリーとして月4回「手作り楽しもう会」を実施。その他にも季節を感じさせてくれる作品展、ワークショップを開催。

○ 西ノ京の町家通り

西ノ京の住宅街に昭和の初めに建てられた賑やかな9棟の連棟町家が立ち並ぶ通りがある。その町家には元々住み続けている住人に加え、建築やウェブのデザイナー達、お菓子教室や語学教室を営むフランス帰りの食ジャーナリスト、学生の集う家として楽しむ大学の教授など、様々な住人がいる。空き家になった1軒の町家を昭和時代の姿に修復し、さらに空き家となった隣の1軒も同じく修復し、…を繰り返して現在の町家通りとなった。教室を開いたり、町家で宴やパーティーを開いたりすることで、近所の方も巻き込んだ付き合いが生まれている。町家が修復されたことにより、まちにゴミがあまり捨てられなくなったり、近所の方が誇りに思うようになったりと、ちょっとした「良いこと」があふれるようになっている。

○ 素人の乱

自由な生き方を求める若者グループ。東京都杉並区のＪＲ高円寺駅近くの北中通り商店街で、リサイクル店や古着屋、飲食店など７店舗を運営し、商店街とともに街の再生に取り組んでいる。

生涯学習・知識取得の仕組み

≪具体的事例≫

○ フィンランドの教育手法

大学の授業料は無料。１７歳以上の学生には、５００ユーロの生活援助がある。研究のプロジェクトチームの計画が立つと、スポンサー集めを開始。修士レベルの学生が企業から委託を受けて修士論文を書くことも（教育が産業と結び付いているとの批判あり）。大学はチューターシステムで、私生活を含めた援助がある。また、国公立大学のすべての学部・学科の授業を選択できるシステムをとっている。

広報の工夫

取組③ 送付封筒の活用

市からの送付書類の封筒やはがきを利用し、市の取組を紹介する。

取組④ ロコミの利用

子どものロコミが親の耳に入り、親同士のロコミとなって広がっていくというパターンが多い。子どもの心をつかむことができるよう、保育施設や公園等でのＰＲ方法を考える（これらの施設でのイベントの企画等）。また、親世代に対してもオムツの交換スペースに乳児向けの情報チラシを置くなど、対象者を絞った的確な情報提供を行うことで、広報の費用対効果を高める。ただし、嘘の情報が流れないように発信する情報を精査する必要がある。

取組⑤ 名札や名刺、切符などに施策名をさらっと入れちゃおう作戦

市職員の名札や名刺に、京都市で取り組んでいる子育て支援事業の名前を入れて、視覚的に少しでもアピールする。

Cユニット提案

広がる共助，変わる公助 ～ジリキが育てる心地いい京都流コミュニティ～

未来の京都創造研究会委員 4名

乾明紀（京都造形芸術大学芸術学部准教授）
神吉紀世子（京都大学大学院工学研究科准教授）
空閑浩人（同志社大学社会学部社会福祉学科教授）
平井康宏（京都大学大学院工学研究科准教授）

次期京都市基本計画策定支援チーム 9名

今富僚二（文化市民局）
小泉進（環境政策局）
稲田和久（中京区役所）
藤本清敏（人事委員会事務局）
木下知子（右京区役所）
西村悠（消防局）
石田大二郎（都市計画局）
岸根郁朗（下京区役所）
藤田麻以子（産業観光局）

戦略の特徴

京都の身近な地域における市民や地域組織の活動に着目することは当たり前ではあるが、それを「京都力」として位置付けようとする点，そして従来の地域との関係をいわば根本的に組み替えようとする点に，大きな特徴がある（この点は，行政改革の視点にも連なるものである）。

自助，共助，公助の考え方も，近年では当然とされることであるが，伝統と現代を結び，市民の間の信頼関係を構築していこうとするところに行政の役割を設定している点がユニークである。

この考え方の延長上には，一律の地域行政ではなく，京都力の高い地域がその自治的な競争力を発揮するモデルや，市民の力が発揮されることにより多くの応援が行く仕組み，いわば一律の地域支援ではなく選択と集中をする地域政策が含意されている点も重要である。

重点戦略 広がる共助，変わる公助 ～ジリキが育てる心地いい京都流コミュニティ～

京都の未来像

助け合う地域，見守る社会，住み続けたい京都
～これまでの資源を活かした市民主体による
京都ならではの風を感じるコミュニティづくり～



【重点戦略の基本的な考え方】 京都の未来像を実現するため，

- ① 地域コミュニティをはじめ共助が持つ様々な役割や新たな可能性を重視し，
 - ② 豊かな共助・地域力（＝京都力）を京都の最大の資源・強みの一つと考え，行政として積極的な支援体制を構築する。
 - ③ その際，地域力を産み出してきた背景にある京都ならではの様々な土壌を意識し，
 - ④ 地域ごとの強みや特性を活かしつつ，それぞれの地域で異なり，また変化していく課題・ニーズに柔軟に対応できるよう，行政の在り方を見直すとともに，
 - ⑤ あらゆる行政分野，施策において，京都力を高めるという視点を持ち，支援体制を充実する。
- 以上を京都市の基本スタンスとして，そこに住む誰もが地域に関心を持ち，愛着を感じるような土壌（雰囲気）づくりと，それぞれの地域に合った種を育てるような支援メニューを展開する。

2 地域に対する市の支援体制の構築（種育て）

① 地域アドバイザー
となる人材の確保
（人）

② 地域運営のため
の資金の確保
（お金）

③ 地域横断的な
自治組織の形成と
拠点の確保
（組織）

1 地域を支える土壌づくり

《現状》

私たちの暮らしを支える「自助＋共助＋公助」の変化が進んでいる。

- ① 生活の都市化・近代化が進み、個人で解決できる範囲が広がった。＜自助の拡大＞
- ② 高度経済成長期以後の市民ニーズの高度化・多様化に対応し行政サービス（公助）が肥大してきた。
＜公助の肥大＞
- ③ 自助と公助の拡大、更に核家族化の進展など個人志向の高まりに伴い、共助（特に従来型の地縁組織）の役割・存在意義は薄れてきた（かのように認識されている）。＜共助の縮小・変化＞

一方、社会状況の変化に伴い、従来の自助、公助だけでは解決困難な新たな問題も生じ、共助の役割が再び、見直されようとしている。

子育て、防災防犯、高齢者の見守りなど、「いのち」に関わるセーフティネットとしての欠かせぬ役割の他、地域の魅力や価値を高めるまちづくりの原動力としての役割など、自助と公助の隙間を埋める様々な活動、可能性が共助（地縁、NPO等）の中から生まれている。

京都は、元々共助（地域力）が高い地域である。地蔵盆や各地域のお祭り、路地、寺社空間、ちびっこひろば、番組小学校など、人々が自然と集まり、地域の核となる場（ソフト、ハード）が多数存在している。

市民の暮らしを支える共助をサポートしていくため、こうした京都の資源（強み）を活かし、地域と行政の曖昧な関係を見直し、京都市として、積極的に支援・連携体制を考えていく必要がある。

《目標》

* 共助を高める

- 地域の者は地域で守り、地域のことは地域で決める（地域におけるセーフティネットの再構築と地域主導による運営）。

《条件》

（制約）

- ・ 地域（共助）現状の客観的把握
- ・ 地域のコンセンサス
- ・ 行政内部の組織改革

（資源）

- ・ 「京都ならではの」の活用
- ・ 地縁的なつながりの強さ
- ・ 有形、無形の地域資源の発掘活用
- ・ 大学、学生の活用

《主体》

- ・ 地域住民
- ・ 自治会・町内会
- ・ 各種団体（社会福祉協議会、自主防災会等）
- ・ 目的別組織（ボランティア団体やNPO団体等）
- ・ 京都市、教育機関、地元企業

《方略》

1 地域を支える土壌づくり

住んでいる地域に関心・愛着が持てるような、自然に地域と繋がりが持てるような、住み心地のいい土壌をつくる。（例）ウエルカム・レター、寺社や区役所又はスーパーなどでの「サロン」の開催、地域の祭りづくりや祭り復活支援プロジェクト、「京都市民の日」など

2 地域に対する市の支援体制の構築（種育て）

地域の実状と将来ビジョンを的確に把握し、地域に応じた支援ができる組織体制を構築する。そのうえで、市として幅広い具体的支援メニューを整える。

① 地域アドバイザーとなる人材の確保（人）

地域に寄り添って信頼関係を構築しながら、様々な角度、立場から地域をサポートできる人材を確保する。（例）まちづくりアドバイザーの拡充、地域における人材育成、学区担当制など市職員の地域現場へ関わる機会の拡充など

② 地域運営のための資金の確保（お金）

地域の実情・課題に合った費用行使ができるような仕組みをつくる。

（例）従来の縦割り補助金の統合、用途を定めない包括的補助金の交付、大学や地元企業との協同による自主財源の確保、企業、個人からの寄付金の募集など

③ 地域横断的な自治組織の形成と拠点の確保（組織）

小学校区を中心として、地縁組織や各種団体、目的別組織などがつながる「ネットワークの場」を形成し、拠点が必要な組織には「拠点となる場」を提供する。（例）「勉強会」「ワークショップ」の開催、小学校の空き教室の拠点としての活用（⇒方略の詳細）など

《方略の詳細》

＜方略1＞ 地域を支える土壌づくり

住民同士が顔と名前が一致し、挨拶が交わせる地域って昔はあったように思います。
 そんな地域を作るため、まずは身近な生活環境から見直したいと思います。
 京都市が積極的に地域の空気づくりに目を向け、先頭に立って取り組みたいと考えます。

＊ 地域でこんな取組を考えています。（地域コミュニティの土壌作り）

- ・ 大型スーパーや商店街、京都に多くある寺社と連携しオープンスペースの「地域サロン」を開設してもらい、地域住人が気軽に集まれる場所を提供してもらいます。「地域サロン」には、可能であれば、スーパーや企業などが協賛品、試供品などを提供し、住民が集まりたくなるシステムを作る。企業はアンケートなどを実施することでサロンを活用する。
- ・ 地域に必ずある区役所・支所にもオープンスペースの「地域サロン」を開設し、市や区の実情の紹介、簡易コンビニの設置など、地域に親しまれる区役所・支所を目指します。
- ・ 「京都市民ふれあいの日（仮称）」を制定し、公立小・中・高等学校と公的施設は休みとし、市内の私立学校、大学、一般企業には休暇協力（もしくは地域活動をした人は出勤扱い）をお願いします。「京都市民ふれあいの日（仮称）」は市民全員で清掃活動や体育大会などを実施するように推奨し、希望があれば公務員をボランティア派遣します。参加した高校生以下の子どもと60歳以上の高齢者には銭湯入場券を配ります。銭湯は昔から地域コミュニティの場として活躍してきました。その銭湯を地域コミュニティの場として復活させるためにも活用を促していきます。
- ・ 転入者には、区役所で新しくお住まいになる地域の案内、新しくお住まいになる区の実情等を「ウェルカム・レター」として配布します。

＜方略2＞ 地域に対する市の支援体制の構築（種育て）

地域の実状と将来ビジョンを的確に把握し、地域に応じた支援ができる組織体制を構築します。
 そのうえで、市として具体的支援メニューを整えていきます。
 地域と行政の在り方を見直し、地域の活動をサポートします。

（1） 地域アドバイザーとなる人材の確保（人）

地域の問題は地域によって様々です。地縁的組織が活発に活動している地域、そうでない地域、活動が活発な地域でも何らかの問題は抱えていると思います。そこで、地域が抱えるそれぞれの問題の解決のため、地域アドバイザーを派遣し、自立した、自主的な地域運営の手助けをします。

京都市（文化市民局・地域づくり推進課）に現在は、11名の「まちづくりアドバイザー」が在籍し、区ごとの担当制で活躍しています。

＊ 次のような取組を検討します。

- ・ 「まちづくりアドバイザー」の拡充。小学校区を基準に考え、1人で5～10程度の学区を担当するため、現在の11人を22人～44人程度へ拡充する。又は、完全学区担当制として学区に1人配置（約230人）し、地域の成熟度に合わせて減らしていくことも考えられます。
- ・ 地域における人材の育成。住人にも「まちづくりアドバイザー」になってもらう。
- ・ 市職員を現場へ。市職員の多くが京都市民でもあります。そんな市職員に地域活動への参加を推奨します。

(2) 地域運営のための資金確保（お金）

地域の実情・課題にあった費用行使のできる仕組みを作ります。

現在の補助金制度をもっと使いやすくもっと透明性の高いものにし、自主財源の確保、企業や個人の寄付金の仕組みを分かりやすく、利用しやすいものにします。

* 分かりやすい、使いやすい仕組みを構築します。

- ・ 各種団体に支給されている補助金を統合し、窓口となる横断的組織に支給することとし、地域で必要に応じた使い方を決めることができるようにします。これにより柔軟で有効なお金の使い方ができるとともに、お金の使い方を住民で決めるため、みんなに分かりやすい使われ方がされるようになります。
- ・ 地元企業や大学、NPOなどと共同でコミュニティビジネスが展開できるように推奨します。
- ・ 地元の企業や個人が寄付を地元地域にしやすいように制度を整理します。以前、あるお寺から、「観光シーズンには地元住民の方に多大な御迷惑を掛けているので、その分地元貢献したいのですが。」と区役所に相談があり、寄付がされたと聞きました。そのように、地元貢献したいと考える企業、寺社はまだまだあるのではないかと期待しています。
- ・ 提案型補助金の創設。地域内で困った問題がある、新しい取組を実施し、町おこしをしたいなど、地域住民からの提案を募り、一定の条件をクリアすれば、限度内で補助金を支給することとします。住民が自分の街に愛着を持つようになります（e x. 京都府地域力再生プロジェクト支援事業交付金）。

(3) 地域横断的な自治組織の形成と拠点の確保（組織）

地域活動の行政サポートとして、横断的組織の形成と活動拠点の確保は重要な方略の一つと考えます。

地域にある、地縁的組織と各種関係団体、NPOなどのテーマ別組織をまとめる横断的組織を形成します。組織があっても拠点となる場所がなければ、その組織の活動はうまく行きません。そのために、拠点となる場所のない地域には拠点の確保もします。

既存の施設であり、利用することに意味のある、地域の重要な役割を担う施設として、小学校が適していると考えます。

現在、統廃合された小学校の跡地を利用し地域コミュニティに活用している場所があります（e x. 上京区の成逸、中京区の竹間、下京区の修徳など全11校）。

場所も広く、子どもの施設や老人の施設など活用は様々で夢のある計画です。

しかし、今回の提案はあえて、在学生のいる小学校を活用し、地域と子どもを繋げ、地域の中に子どもを置くことに意味があると考えます。

現在の社会問題として、学校への過度な要望があると思います。家庭と学校とだけが繋がり、親は子どもの訴えを学校にするしかない状態になっていると思います。そこで、地域が加わり、地域でも子どもの見守りができるようになれば、子どもにより多くの大人の目が注がれ、親も先生も負担が軽減されると思います。

昔のように、地域が子どものよき先生になれるのではないのでしょうか。

① 地域の拠点となる小学校

生徒が通う小学校の空き教室（空き教室がない場合は敷地内にスペースを確保します）を利用することで、子どもが地域の主役となり、子どもを中心として高齢者までを巻き込んだ地域づくりを行うことができます。

そこに横断的組織の事務局を開設し会議室や交流の場となるオープンスペースも設けます。

地域の中心を小学校とすることで、小学校に地域の関心を向け、住人の地域への愛着も増し、人と人のふれあいのある、住みやすい明るい街となります。

また、京都市では小学校での「ふれあいサロン」を開設しておりますが、基本的には下校時間後や休日などの限られた時間での利用となり、活動の拠点にはなっていません。

そこで・・・

* 活動拠点を小学校にする利点

- ・ 地域住人が小学校に出入りすることで、登下校時の防犯対策になります。
- ・ 先生の目の届きにくい休み時間なども地域住民の目があり、先生の負担も軽減されます。
- ・ 小学生と地域住人の接点が増えると、地域内での会話が増え、小学校内の取組だけでなく、地域の取組もスムーズになり、活性化につながります。
- ・ 地域と小学校の連携がスムーズに行き、PTAと地域組織との連携も図りやすくなります。
- ・ 小学校進学前の幼児が小学校に行くことで小学校に馴染み、愛着が生まれます。

* 活動拠点を小学校にすることでの注意点

- ・ 不特定多数の方が出入りすることになるので、小学校に出入りする際は、地域組織もしくは小学校が許可書を発行するなどの対策が必要になります。
- ・ 授業などの妨げにならないように拠点となる部屋の位置を配慮する必要があります。
- ・ 先生がいない時間帯の学校施設の管理方法について地域組織との調整が必要です。

* ちなみに、こんな取組に小学校が利用されています。

- ・ 京都市「ふれあいサロン」は、京都市の138小学校（H19.4.1現在）で開かれ、地元住人と小学校で運営委員会を形成し管理している。主に、児童のいない時間帯の利用で、地元サークルの活動や地域活動の会議などに活用されている。
- ・ 横浜市では、生涯学習「はまなび」を展開し学校の開設を実施している。基本的に横浜市立のすべての小・中・高・特別支援学校（一部実施していない学校あり）が対象となり、校庭・体育館・図書館などの特別教室を開放している。利用に際しては予約制で、平日夜間と日・祝日が利用できる。
- ・ 和歌山県では、「屋外運動場芝生化促進事業」として、学校関係者と地域住民が協力した「運営協議会」を設置し、一定の決まりをクリアした小学校の運動場を芝生化する経費を補助してくれる制度（1校160万円以内）があります。これは、子どもの体力向上と地域コミュニティの活性化を目的に実施されています（その他にも各小学校と地域住民が協同で芝生化しているところも多数あるようです）。

Bユニット提案

京スタイル したはる？

未来の京都創造研究会委員 5名

大山泰宏（京都大学大学院教育学研究科准教授）
岡本晴美（佛教大学社会福祉学部社会福祉学科准教授）
空閑浩人（同志社大学社会学部社会福祉学科教授）
平井康宏（京都大学大学院工学研究科准教授）
松中亮治（京都大学大学院工学研究科准教授）

次期京都市基本計画策定支援チーム 5名

林正道（保健福祉局）
西山正志（都市計画局）（※）
中村和久（消防局）
松本康孝（環境政策局）
吉村智佳（保健福祉局）

※ 平成21年4月まで

戦略の特徴

環境問題への対策や環境都市が注目されているが、それを京都のような大都市で実体化する試みは、必ずしも成功していない。環境保護を前面に出ただけでは成功しないし、市民生活との共生も難しい。京スタイルは、こうした隘路を突破する戦略として、環境共生都市を目指す試みであり、注目に値する。

観光についても、環境共生としての観点から考えると、従来型ではない地域全体を観る、また歴史や伝統文化だけではない生活文化に触れることが重要である。

そこでは、自然環境との共生を目指す都市像が観光資源となるとともに、観光がその資源自体をブラッシュアップしてくれる、こうした相互作用を期待できる。この点は、実は、交通政策においても同様にいえるのである。

京スタイル したはる？

京都の未来像

京都らしさを活かした環境先進都市

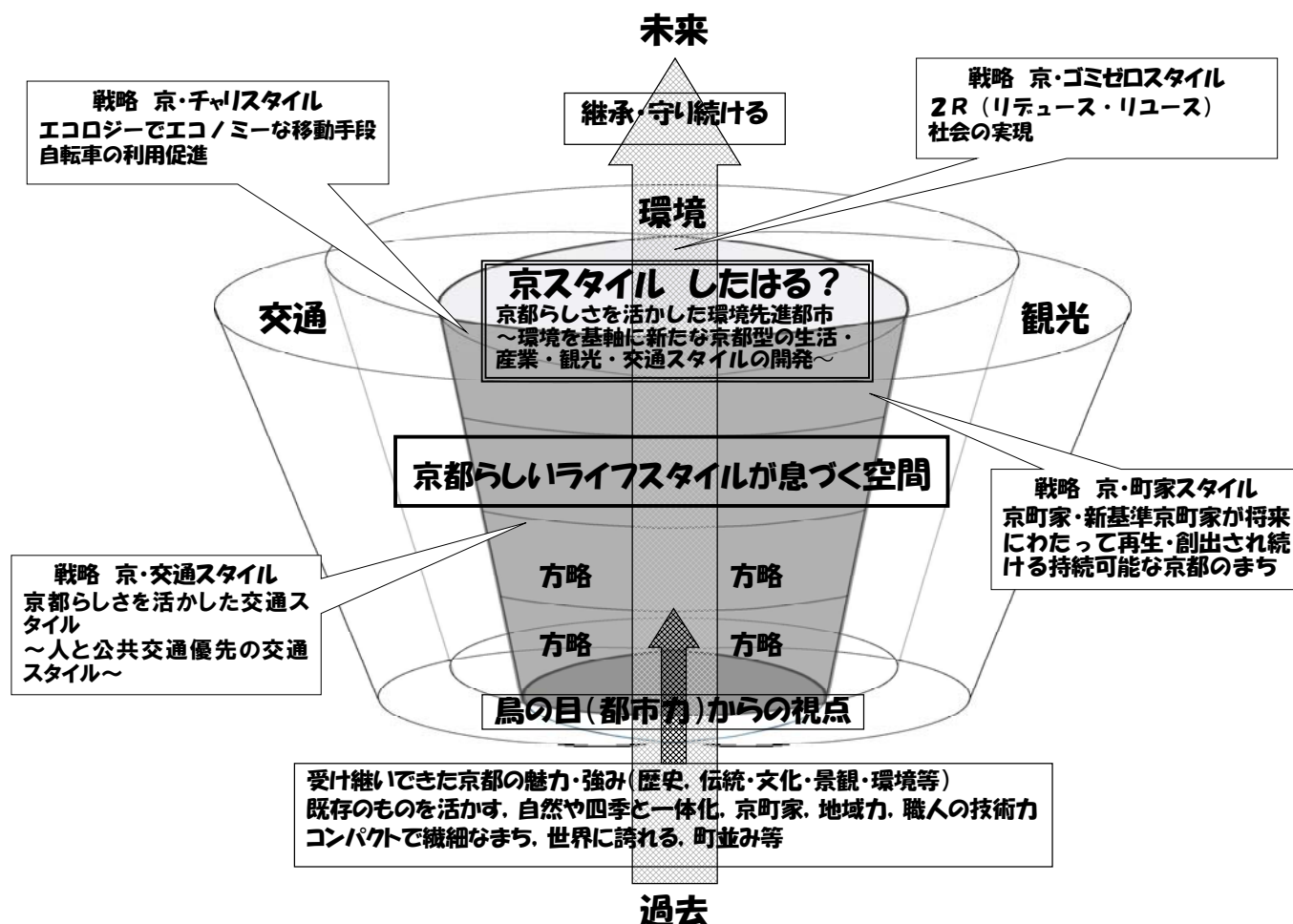
～環境を基軸に新たな京都型の生活・産業・観光・交通スタイルの開発～

- まちのどこもが市民、観光客で賑わう、市民にとって誇れる魅力に溢れる
- 公共交通が便利で、散歩や自転車が似合う
- 地球環境への危機感を市民が共有し、立ち向かう



【重点戦略の基本的な考え方】

京都らしさとしての“既存のものを活かす”，“自然や四季との一体化”，“コンパクトなまち”をまちの空間に拡大させ，新しい伝統を創造する中で，本市が抱える「環境」，「観光」，「交通」という課題であり，強みである３つの分野をハード面から融合させた新たな取組を行う。市民や来訪者が，自らのライフスタイルを見つめ直し，ライフスタイルを転換させることを通じて前述の課題を解決し，目標を達成する。さらには，市民や来訪者にとっても魅力的な暮らし方―「京（きょうと）スタイル」が市民の間に広まり，京スタイルを世界に発信するまち京都を創造する。



《現状》

【環境面】

- * 民生部門のCO2排出量は、基準年（90年）と比較して増加している。
- * 2R（リデュース、リユース）情報を含め、環境について知識・行動がまだ市民に浸透していない。

【観光面】

- * 町家の維持保存が課題となっている。
- * エコブームが話題を呼び、環境に配慮した暮らしが注目されている。

【交通面】

- * 観光地を中心に、都心部では、自動車による渋滞が発生している。
- * 地球温暖化防止のためには、運輸部門からのCO2排出量を減らすことが必要である。
- * 公共交通の利便性が高くなく中距離の移動には、自動車が利用されることが多い。
- * 自転車マナーの確立が不十分
- * 限りのある駐輪スペース

◆基礎データ◆

【環境面】

- * 温室効果ガス排出量の比較（90年→06年を比較）
民生・業務部門+17.3%増
民生・家庭部門+21.8%増

【観光面】

- * 京町家は都心18学区で5,992軒存在
- * 平成10年度調査時点から927軒除去、年平均132軒除去

【交通面】

- * 交通手段別分担率（H2→H12）
自動車 26.5%→28.2%
鉄道 14.7%→16.3%
バス 6.8%→5.4%
二輪、徒歩 44.9%→42.9%
- * 観光客の交通機関別利用者数（H15→H19）
鉄道 26,104→30,386千人
マイカー 13,174→14,335千人

《目標》

【環境面】

- * 温室効果ガス排出量の削減目標 2020年 ▲30%（1990年基準）
- * 処理処分量（焼却量+直接埋立量）削減率 2015年 ▲25%（2001年基準）
- * 再生利用率 2015年 27%

【観光面】

- * 京町家・新基準京町家をととして、環境に優しいライフスタイルを広める。
- * 京町家ステイなど、ゆとりのある体験型観光コンテンツを充実させる。

【交通面】

- * 交通手段別分担率
→自動車20%以下、鉄道20%、バス10%、その他50%以上（2030年）（環境モデル都市目標値）
- * 自動車依存社会から脱却することによる環境への負荷の低減
→運輸部門のCO2排出量2020年553,900t→CO2削減（環境モデル都市目標値）
- * 安心・安全・便利な自転車利用環境の整備
- * 自転車利用マナーの向上

（出典は各スタイルに記載）

《戦略》

1 京・ゴミゼロスタイル

市民生活の視点からリデュース・リユース（2R）を促進し、環境にやさしいライフスタイルへと転換を図る。

2 京・町家スタイル

既存の京町家は、統一した景観として保存・再生し、また、現代の新基準京町家は、環境に優しい等の優れた点を発信し、両京町家が生活、産業、環境、観光等の様々な面での京都の優れた資源として再生・創出されるとともに、昔ながらの京都らしいライフスタイルへと転換を図る。

3 京・交通スタイル

京都のコンパクトな都市構造を活かし、京都が受け継いできた京都らしさを継承し守り続け、かつ、新たに引き継いでいける交通スタイルの確立のため、環境にやさしい安全・安心で利用しやすい、人と公共交通優先の交通スタイルへと転換を図る。

4 京・チャリスタイル

自転車利用環境を整備することにより、自転車の利用を促進する。自転車が公共交通と徒歩を補完し、移動の利便性を高め、かつ環境にも優しい交通体系の構築を図る。

重点戦略
「京スタイル したはる?」

戦略 京・ゴミゼロスタイル

京都の未来像

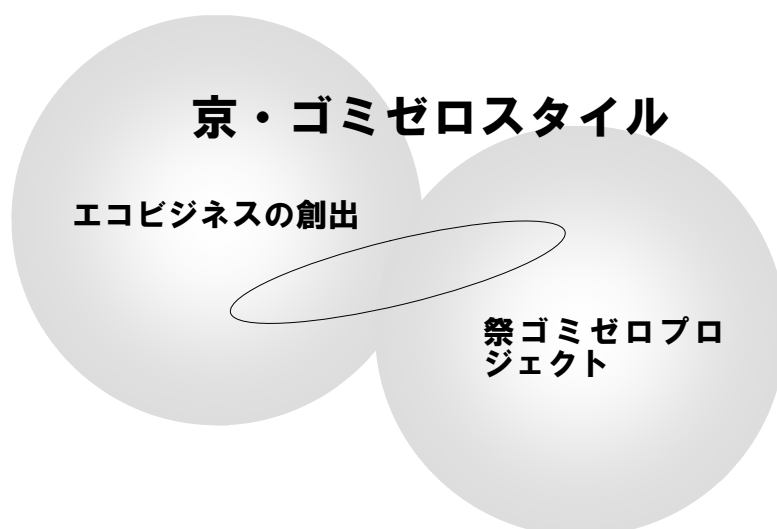
2R（リデュース・リユース）社会の形成

- 2R社会を目指すことにより
- ゴミの減量，環境負荷の低減
 - 低炭素社会の推進

【戦略の基本的な考え方】

低炭素社会の形成が重要とされている今，CO2 排出量は，総量では最近 10 年間ほぼ横ばいであるが，家庭，事務所・商業施設等といった民生部門は基準年（1990 年）と比較して増加している。そこで，市民生活の視点から 2R（リデュース・リユース）を促進し，ライフスタイルを変えるきっかけを提供する。

また，観光都市・環境モデル都市として，既存の環境対策や審議会・委員会との融合のもとゴミゼロ（2R）を目指し，世界へ発信する。



《現状》

- * 民生部門のCO2排出量は、基準年(1990年)と比較して増加している。
- * 2R情報を含め、環境についての知識・行動が、まだまだ市民に浸透し切れていない。

◆基礎データ◆

- * 温室効果ガス排出量の比較(1990年→2006年を比較)

民生・業務部門	+17.3%増
民生・家庭部門	+21.8%増

(環境モデル都市)
- * ごみの総排出量
削減率 ▲7.6%
- * 処理処分量(焼却量+直接埋立量)
削減率 ▲16%
(2001年→2006年を比較)
- * 再生利用率
11%→15%
(2001年→2006年)
(京都市循環型社会推進基本計画 京のごみ戦略 21)

《目標》

- * 温室効果ガス排出量の削減目標 2020年 ▲30%(1990年基準)
- * 処理処分量(焼却量+直接埋立量)削減率 2015年 ▲25%(2001年基準)
- * 再生利用率 2015年 27%
(京都市循環型社会推進基本計画 ～京のごみ戦略 21～)

《京都力》

- * 既存の環境対策や環境モデル都市に選定されるなど環境に対する意識が高い。
- * 大学等の研究機関が集積し、環境技術開発が存在する(環境ナノ拠点の形成)。

《主体》

- * 行政・事業者・市民(観光客)がゴミゼロを目標に協同的に取り組む。

《方略》

1 エコビジネスの創出

(生活の中で、自然と環境ビジネスに触れる機会を創出する)

- ・ エコファイナンシャルプランナーによる省エネ・新エネ生活への経済的なアドバイス(グリーン購入・グリーンコンシューマー定着に関わる事業の提案・支援)
- ・ レジ袋有料化の徹底。デポジット制度の導入。リユース・リースレンタルショップの普及(2Rネットワークの形成)
- ・ 次世代省エネ基準の作成(太陽光パネル・LEDなどの次世代省エネ・新エネ技術商品の普及、新町家・木の家など省エネラベルの建築分野への拡大)

2 祭ゴミゼロプロジェクト

(数多くある祭で2Rを促進する)

- ・ 地域祭(市民参加型の祭)でのリユース食器の使用
- ・ 祇園祭開催期間のモディリティマンスリー実施(交通規制により環境負荷を軽減)

重点戦略
「京スタイル したはる?」

戦略

京・町家スタイル

京都の未来像

**京町家・新基準京町家が将来にわたって再生・創出され続ける
持続可能な京都のまち**

- 既存の京町家を土地利用と一体で統一景観として保存・再生
- 新基準町家の暮らしやすさや環境に優しいことを発信し、ライフスタイルの転換を図る
- 京町家ステイによる環境への優しさを京都から世界に発信

【戦略の基本的な考え方】

京都の伝統的な京町家については、近隣の土地利用と一体で統一した景観として保存・再生し、また、現代のライフスタイルに合い、伝統的な京町家とも調和する新基準京町家については、環境に優しく暮らしやすい等の優れた点を発信し、京町家及び新基準京町家が生活、産業、環境、観光等の様々な面での京都の優れた資源として将来にわたって再生・創出されるとともに、昔ながらの京都らしいライフスタイルへと転換を図ることを戦略とする。

京・町家スタイル

京町家の保存・再生

京町家の活用

新基準京町家の創出

新基準京町家街の
創出

《現状》

- * 京町家の維持保存が課題となっている。
- * 京町家を活用したレストランや京町家風の建築物が注目されている。
- * 地球温暖化対策や低炭素社会実現のため、環境に配慮した暮らしが注目されている。

◆基礎データ◆

- * 町家は都心 18 学区で 5,992 軒存在
(平成 16 年 3 月京町家まちづくり調査集計結果)
- * 平成 10 年度調査時点から 927 軒、年平均 132 軒除去
- * 現在、市内に残存する全町家を対象とした調査実施中 (平成 20 年 10 月～平成 22 年 3 月)
- * 年間に約 2%の京町家が失われている

《目標》

- * 京町家・新基準京町家を通じて、環境に優しいライフスタイルを広める。
- * 京町家ステイなど、ゆとりのある体験型観光コンテンツを充実させる。
- * 京都を文化の発信地としてPRする。

《京都力》

- * 世界遺産や文化が数多く存在する。
- * 観光都市として知名度が高い。
- * Do you Kyoto? など、環境に配慮した取組が行われている。

《主体》

- * 民間活力が主体となり、行政は、その活動を支援する。
- * エリアマネジメント組織による土地利用と一体での統一景観として、京町家を保存・再生する。

※ 京町家

昔からある既存の京町家(新築、改修したものを含む)

※ 新基準京町家

京都の木材を活用し、現代の住宅基準やライフスタイルに合い、かつ、伝統的京町家とも調和する京町家

《方略》

1 京町家の保存・再生

京都の伝統的な京町家については、エリアマネジメント組織により、近隣の土地利用と一体で統一した景観として保存・再生する。統一した景観として保存・再生した町並みは、歩いて見ることが楽しいということを、市民、観光客が自然と認識することとなる。
資金については、外国資本やふるさと納税を充当する。

2 京町家の活用

- ・ 京町家ステイなどゆとりのある観光をすすめる、体験型観光を取り入れることにより、観光客にも環境にやさしい京町家を体験してもらい、京都から世界に発信する。
- ・ 京町家において、エコ・キョウマチヤ・フォーラム(エコホテルフォーラムの京町家版)を開催し、観光客に環境に優しい観光を体感してもらう。
- ・ 京町家を「文化」の場である若手アーティストの作品展示場所や、「学び」の場である学生の総合的学習の機会、職業体験等として活用するとともに、地域コミュニティの基点として活用する。

3 新基準京町家の創出

新基準京町家が環境に優しく京都の気候の中で暮らしやすい等の優れた点を情報発信し、また、エコファイナンシャルプランナーが、環境に優しいライフスタイルの節約効果について相談にのってくれる住宅展示場を創出し、楽しく環境問題に取り組むことができる仕組みを構築する。また、その住宅展示場から、情報発信することで、新基準京町家を広める。

4 新基準京町家街の創出

方略1～3を取り入れたモデル地区を創出する。

- ・ モデル地区では、環境については、「京・ゴミゼロスタイル」とし、2R社会を実践する。また、交通については、「京・交通スタイル」、「京・チャリスタイル」を取入れ、人、自転車及び公共交通中心の交通スタイルとする。

重点戦略
「京スタイル したはる?」

戦略

みやこ 京・交通スタイル

京都の未来像

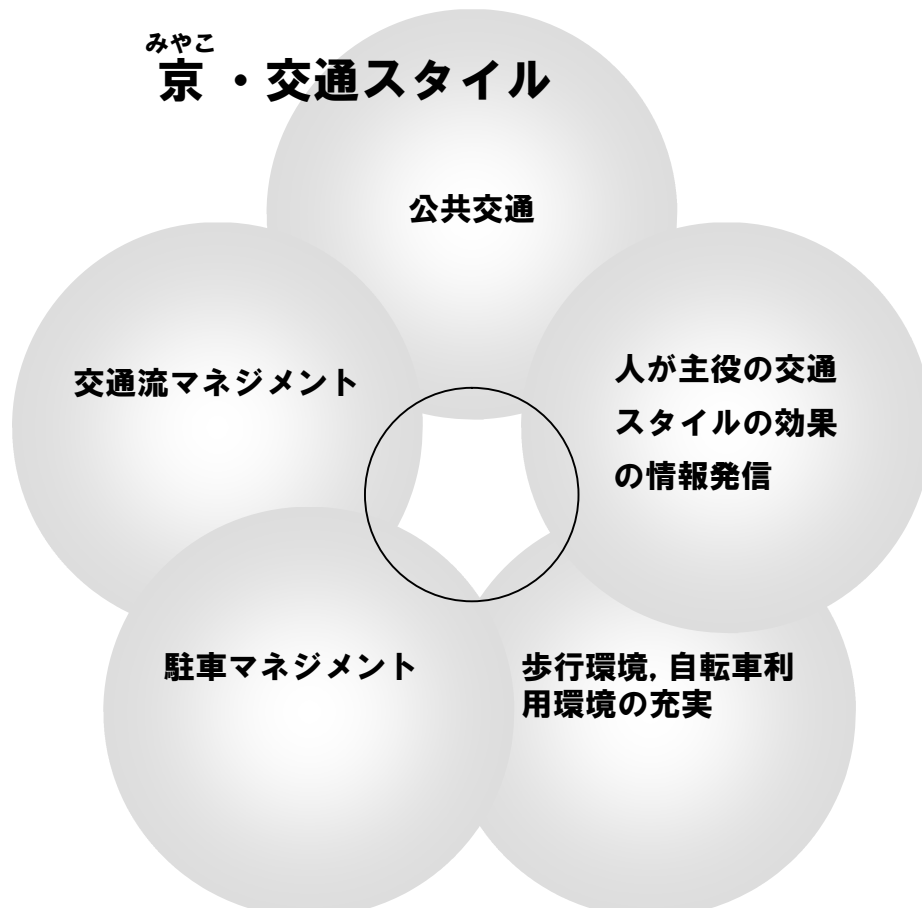
京都らしさをいかした交通スタイル

～人と公共交通優先の交通スタイル～

- 持続可能な都市（環境先進都市，低炭素社会）として在り続ける
- コンパクトな都市構造に適した人が主役である交通体系
- 観光の質を高める交通体系

【戦略の基本的な考え方】

人口減少，超高齢化社会，地球温暖化へと進む中，持続可能な都市で在り続けるためには，京都のコンパクトな都市構造を活かし，京都が受け継いできた歴史，伝統，文化，環境，観光，景観などを継承し守り続け，かつ，新たに引き継いでいける交通スタイルが必要である。そのためには，自動車依存社会から脱却し，環境にやさしい安全・安心で利用しやすい，人と公共交通優先の交通スタイルへの転換が必要であり，次の戦略を提案する。



《現状》

- * 観光地を中心に、都心部では、自動車による渋滞が発生している。
- * 地球温暖化防止のためには、運輸部門からのCO2排出量を減らすことが必要である。
- * もともとコンパクトな都市構造である京都にとっては、必要な自動車は限られている。
- * 市民や観光客にとって利用しやすくわかりやすい交通体系とはなっていない。
- * 京都においては、自動車による観光は似合わない。また、自動車による観光では、本当に質の高い観光とはなっていない。
- * 自動車利用者が目的に応じた道路の使い方をしていない。
- * 道路の空間的、時間的役割分担がはっきりしていない。
- * 荷捌きシステムの在り方が課題

◆基礎データ◆

- * 交通手段別分担率(H2→H12) (第4回京阪神都市圏PT調査)
自動車 26.5%→28.2% 鉄道 14.7%→16.3%
バス 6.8%→5.4% 二輪、徒歩 44.9%→42.9%
- * 交通機関別輸送分担率(S60→H18) (H18京都市交通事業白書)
マイカー 42.4%→54.1% 鉄道 19.7%→24.4%
バス 35.7%→14.4%
- * 観光客の交通機関別利用者数(H15年→H19年)
鉄道 26,104→30,386千人 (H19京都市観光調査年報)
マイカー 13,174→14,335千人
バス 4,462→4,724千人
- * 観光客の利用交通機関別構成比(H19) (同上)
鉄道 61.4%, バス 9.6%, マイカー 29.0%
- * 観光客の京都に関する感想のワースト2=交通と道路 (同上)
- * 時間どおりに運行するならばバスを利用する(33.6%) (H19年度第1回市政総合アンケート)
- * 鉄道・バスの本数が多ければ利用する(37.2%) (H18年度第3回市政総合アンケート)

《目標》(環境モデル都市目標値)

- * 交通手段別分担率(2030年)
→自動車 20%以下, 鉄道 20%, バス 10%, 徒歩・二輪 50%以上
- * 自動車依存社会から脱却することによる環境への負荷の低減
→運輸部門のCO2排出量 2020年 553,900t-CO2削減

《京都力》~京都力を活かす~

- * コンパクトな都市構造
- * 世界に誇るべき魅力ある財産(歴史、伝統、文化、環境、観光資源など)
- * 地域力(自治組織、地元団体、NPO、交通関係組織、大学など)

《主体》

- * 市民や事業者、また、観光客の交通スタイルの転換を図る必要があるため、行政、市民、事業者、大学などと連携し、推進する。
- * エリアマネジメント組織により実施

《方略》

1 公共交通

- ・ 市民や観光客にも利用しやすくわかりやすい地下鉄を中心としたバス路線への再編
- ・ バスのダイヤ再編
- ・ 新たな技術を活用した公共交通の導入(LRT, IBT)

2 交通流マネジメント

- ・ 自動車利用実態調査により、必要な自動車交通を本市の都市構造や生活スタイルに適した形で処理
- ・ 道路機能に応じた空間的、時間的役割分担の確立
- ・ ITS等を活用した自動車利用者の目的に応じた適切な道路への誘導(規制ばかりが有効ではない)
- ・ パーク&ライド、ロードプライシング
- ・ カーフリーマンスリーの実施(祇園祭りとかあわせた、カーフリーマンスリー)
- ・ ライフスタイル転換(思考の転換、意識改革)
- ・ 人が主役の交通スタイルの楽しさを情報発信し、市民や観光客に意識転換をはかってもらう(モビリティマネジメントの推進)

3 駐車マネジメント

- ・ フリンジ駐車場システム
- ・ 物流の荷捌きシステム、共同集配システムの構築など

4 歩行環境、自転車利用環境の充実

- ・ 道路利用形態の再配分、トランジットモール、オープンカフェ等
- ・ 歩道の拡幅、バリアフリー化、無電柱化
- ・ 自転車ネットワークの構築

5 人が主役の交通スタイルの効果の情報発信

※ エリアマネジメント組織により、モデル地区において上記方略を組み合わせて実施

《効果》

- ・ CO2排出削減、健康増進
- ・ 歩くことで本当の京都の魅力を実感、歩くことが楽しくなる。
- ・ まちが憩いの場、更にまちが魅力的に、更に歩くことが楽しくなる。

※ エリアマネジメント組織
地区の住民や事業者等が自治的に地区の公共空間の環境整備、維持管理、イベント実施等のまちづくり活動を担い、活動資金の調達や財源の確保を含めた地域自治を思考する組織

重点戦略
「京スタイル したはる?」

戦略

京・チャリストایل

京都の未来像

エコロジーでエコノミーな移動手段自転車の利用促進

自転車利用により

- 環境への負荷を軽減する
- 健康の増進を図る
- 移動がより便利になる

【戦略の基本的な考え方】

環境モデル都市であり、かつ「地球温暖化防止京都会議」の開催都市でもある京都市は、その「京都力」を活かし、環境への取組の先駆者になることを目指す。その取組の一つとして、環境への負荷が少ない乗り物である自転車の利用促進を図る。市内の長距離は公共交通、近距離は徒歩で移動するが、公共交通や徒歩を補完する乗り物として、自転車利用の促進を提案する。

市民や観光客が心地よく自転車を利用できるよう、環境の整備にも取り組む。

京・チャリストایل

コミュニティサイク
ルシステムの導入

自転車利用環境の
整備（ソフト面）

自転車タクシーの
利用促進

自転車利用環境の
整備（ハード面）

自転車登録制度の
創設

エリアマネジメント
手法

《現状》

- * 公共交通の利便性が高くない中距離以上の移動には、自動車を利用されることが多い。
- * 自転車利用マナーの確立が不十分
- * 自動車を中心に整備された道路空間
- * 限りのある駐輪スペース
- * 交通体系の中での自転車の位置付けが不明確

◆基礎データ◆

- * 自転車事故（H20）
件数 2,340 件
死者数 5 人
- * 交通手段分担率（H12）
自動車 28.2%
二輪・徒歩 42.9%
- * 公共駐輪場（H21.2 現在）
57 箇所 約 3 万 5 千台

《目標》

公共交通と徒歩を補完する，安心・安全・便利な移動手段⇒自転車

- * 自転車利用マナーの向上
- * 安心・安全・便利な自転車利用環境の整備
→市内自転車による事故 死者ゼロ
- * 移動手段を自動車から公共交通と自転車へ転換することによる環境への負荷の低減
→運輸部門のCO2排出量2020年553,900t
- CO2削減(環境モデル都市目標値)
- * 交通分担率
→自動車 20%以下 二輪・徒歩 50%以上

《京都力》 ～京都の財産を活かす～

- ・ 市街地の大部分が平坦
- ・ 地域力が強い。
→自転車利用マナーの啓発
- ・ 大学や観光名所が多い。
→自転車利用のニーズがある。

《主体》

- ・ ハード面の整備は、行政が主体となって取り組み、ソフト面では学校や地域、市民が主体となって利用マナーの啓発と遵守に努める。
- ・ 相互に協力し、ハードとソフトの両面から整備する。
- ・ 民間事業者にも協力を求める。

《方略》

- 1 自転車利用環境の整備（ソフト面）
- 2 自転車利用環境の整備（ハード面）
- 3 コミュニティサイクルシステムの導入
- 4 自転車タクシーの利用促進
- 5 自転車登録制度の創設
- 6 エリアマネジメント手法

詳細は次頁以降参照

《分野別の効果》

- 1 環境
 - ・ CO2 排出量の低減
- 2 交通
 - ・ 公共交通を補完し，より便利に
- 3 観光
 - ・ 公共交通の利便性が高まり，観光名所間の移動が便利に。
- 4 安心・安全
 - ・ 自転車の利用環境を整備することにより，歩行者へも安心・安全な空間を提供
- 5 財政
 - ・ 観光客が増えることによる収益増
 - ・ 燃料消費量の減少による貿易赤字の削減

《方略の詳細》 京・チャリストイル

方略1 自転車利用環境の整備（ソフト面）

現状 自転車には明確なルールや違反に対する罰則があるにも関わらず守られないことが多い。そのことにより、歩行者からも自動車からも邪魔者扱いされる。

	法により罰則は定められているが・・・
(例) 夜間に無灯火で走行する。	→ 5万円以下の罰金
歩道を猛スピードで走行する。	→ 3ヶ月以下の懲役又は5万円以下の罰金
車道の右側を通行する。	→ 3ヶ月以下の懲役又は5万円以下の罰金
一時停止をしない。	→ 3ヶ月以下の懲役又は5万円以下の罰金

理想 自転車利用者全員がルールを守ることにより、歩行者や他の自転車、自動車の安全に配慮する。自動車は自転車の安全な走行に配慮し、交通全体の安全性を高める。

提案A：総合交通体系の中での、自転車の位置付けを明確化し、啓発する。

自転車は環境に優しい乗り物であるが、パーソナルな乗り物でもある。

優先順位 **1位 歩行者** **2位 公共交通** **3位 自転車（軽車両）** **4位 自動車**

提案B：自転車のルールとマナーの啓発

学校教育の一環として取り組む。

- ・ 年齢に合わせた自転車（交通）教育を実施する。
- ・ 事故例を提示し、交通事故加害者や被害者になり得ることを教える。
- ・ 安全な自転車走行の方法を教える。

提案C：悪質な違反者に対する取締りの強化

自転車マナー向上期間などの創設（府警との連携が不可欠）

方略2 自転車利用環境の整備（ハード面）

現状 危なくて車道を走れない。駐輪場が足りない。 → 歩道走行や違法駐輪につながり、交通事故の要因となる。

理想 歩行者、自転車、自動車の三者の走行空間が分離され、相互の安全が確保される。また、十分な駐輪スペースがあり、違法な駐輪車両がなく、景観も保たれる。

提案A：自転車走行路の確保

- ・ これからの道路は、自転車道を整備する。
- ・ 既存の道路は、走行空間の再配分を行う。
 - ・ 堀川通など片側3車線以上の道路 → 1車線を自転車、公共交通、左折する自動車以外は走行禁止とする。
 - ・ 烏丸通などの片側2車線の道路 → 歩道の幅員を広げ、自転車道を設ける。バス停などを部分的に設ける。
 - ・ 片側1車線の道路 → 幅員が狭い道路は一方通行とすることにより歩道と自転車道を設ける。幅員が広い道路は車道を狭める。
 - ・ 一方通行の道路 → 不必要な自動車の通行を禁止する。

- ・ 新たに自転車道を設けることが困難であれば、線引きをする、交差点の手前だけでも自転車走行路を明示する（自転車の交通事故は交差点内が一番多い。平成 20 年中では自転車事故のうち 72.7%が交差点内）など、できることから始める。

提案B：駐輪場の確保

- ・ 現状の駐輪場整備に引き続き取り組むとともに、特に街中では、既存の駐車場から駐輪場への移行や、限られた空間により多くの台数を駐輪できるシステムの導入（地下式駐輪場、立体駐輪場など）を検討
 - パーク＆ウォークの提案
 - 市街地へは自転車の乗り入れも禁止とし、歩くまちとする。そのためには十分な駐輪場を整備する。

方略3 コミュニティサイクルシステムの導入

コミュニティサイクルシステムとは・・・

共用の自転車を通常のレンタサイクルのように借りた場所に返すだけでなく他の駐輪場（サイクルポート）でも貸出・返却を可能としたシステム。電車やバスへの乗り継ぎの利便性を高め、公共交通機関の利用を促進できる点が特徴

現状 民間事業者によるコミュニティサイクル事業が一部で実施されているものの、限定的

- 目的**
- ① 乗り捨て可能なレンタサイクルシステムの導入により、公共交通を補完し移動をより便利にする。
 - ② 限られた駐輪空間を有効に利用するために、サイクルシェアにより自転車の総量を抑制する。
 - ③ 「自転車で巡る京都」をアピールし、観光客を誘致する。

- 課題**
- ① コミュニティーサイクルポートを設置する場所が少ない。
 - 市営駐車場や駐輪場の一部を利用する。広い道は道路や歩道に設置する。民間事業者や地域にも協力を求める。
 - ② 採算性を考慮すると、コミュニティサイクルシステムは利用料だけではなく、広告費により運営費をまかなう必要があるが、無秩序な広告は景観を害する。
 - 特定の区域内への広告の掲示は事前協議を義務付ける。地下鉄の駅構内や市バス車両内の空きスペースなどに掲示する。

方略4 自転車タクシーの利用促進 ～国内では京都市が初（発）～

現状 京都に最初10台あったペロタクシーは最近では3台に減少し、あまり見かけない。

- 目的**
- ① 環境負荷を低減する。
 - ② 新たな雇用を創出する。
 - ③ ゆとり観光の提案

- 課題**
- ① 安全性への危惧
 - ② 交通渋滞の発生
 - 自転車利用環境を整備する。

方略5 自転車登録制度の創設

京都市内のすべての自転車に対し、登録と、ナンバープレートの設置を義務化する。

現状 自転車の防犯登録は、法により義務付けられているが、未登録でも罰則はない。登録番号も見にくい。

目的 ① 防犯対策
② 放置自転車対策
③ マナー対策

課題 既存の防犯登録制度や府警との調整が必要

方略6 エリアマネジメント手法によるモデル実施

上記方略をモデル地区において、交通政策全般と組み合わせて実施する。

※ エリアマネジメント

地域における良好な環境や地域の価値を維持向上させるための、住民・事業主・地権者等による主体的な取組

Aユニット提案

人々が交流し、創造する都市の形成による京都市の活性化

未来の京都創造研究会委員 4名

乾明紀（京都造形芸術大学芸術学部准教授）
金武創（京都橘大学現代ビジネス学部准教授）
神吉紀世子（京都大学大学院工学研究科准教授）
辻田素子（龍谷大学経済学部准教授）

次期京都市基本計画策定支援チーム 10名

牧澤憲（西京区役所）
枳尾恵梨子（建設局）
木村公則（総合企画局）（※）
飯尾貴之（交通局）
齋藤正利（建設局）（※）
古川辰也（文化市民局）
山本学義（産業観光局）
来海賢一（都市計画局）
馬場直子（上京区役所）
天辰公彦（上下水道局）

※ 平成21年4月まで

戦略の特徴

創造都市戦略にとって、次世代を担う人材の集積や養成は、大きな課題であるが、それと同時に世界中でどこも成功していないといわれている。京都がそうした人材の集積に成功し、起業の場となることができれば、世界の新しいモデルとなる。

京都ブランドは、既存の商品にではなく、京都の想像力と創造力にある、あるいはイノベーションの力という点が強調されているところが重要であろう。そうした力をブランドとして育てることができるか、その環境を用意できるかが、京都には問われている。

重点戦略

人々が交流し、創造する都市の形成による 京都市の活性化

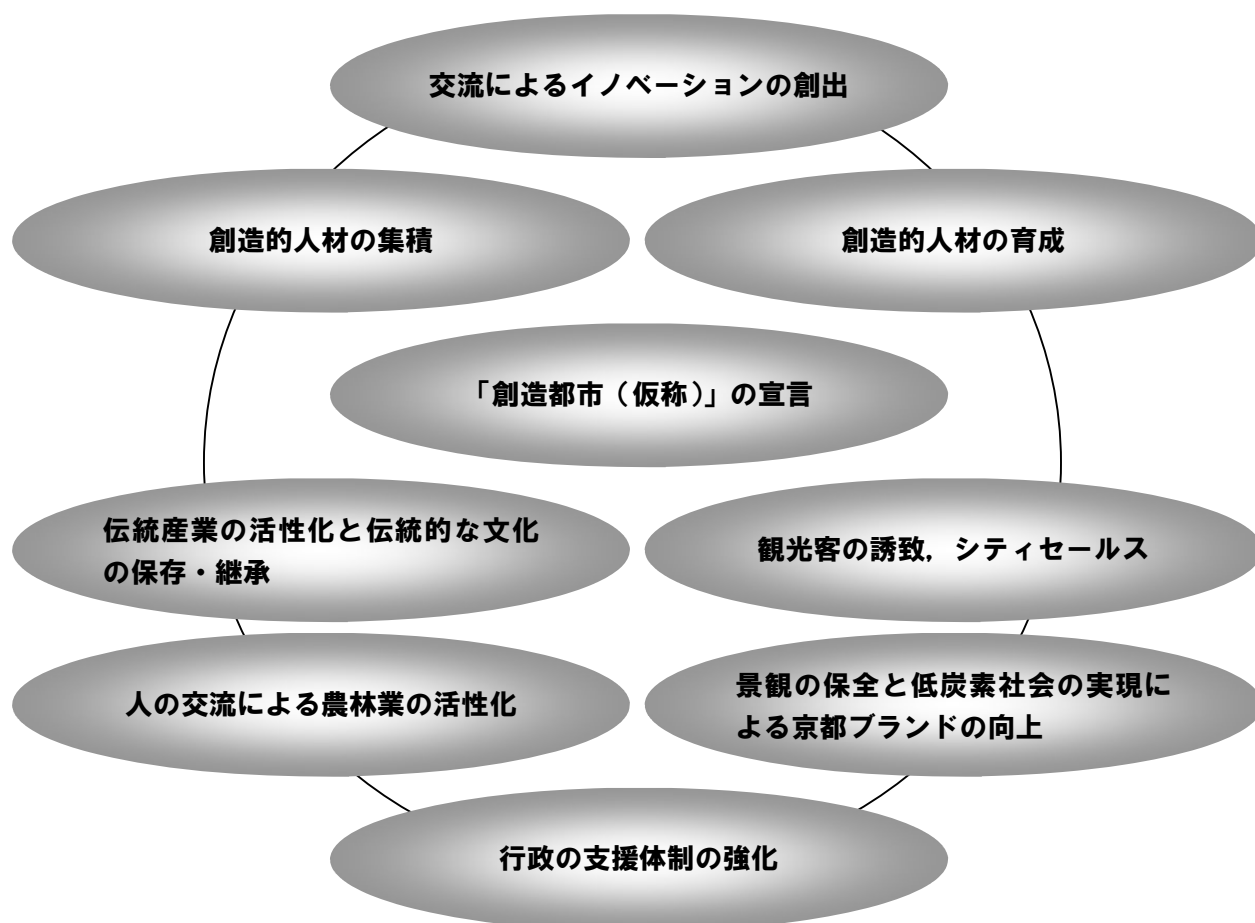
京都の未来像

交流の場を広げ発展し続ける都市
～ひと・もの・情報を呼び込み、経済を活性化させる～
京都の強みを活かして都市の活力を高める



【重点戦略の基本的な考え方】

- ・ 京都ブランド（都市の魅力）を高め、
- ・ 京都力（地域資源）を活用し、
- ・ 人々の交流を通じて創造性溢れる「都市」の形成を図り、新たなイノベーション（新産業）を創出し、
- ・ 付加価値の高いものづくりやサービスにより京都の活性化を目指す。



《概要》

- ＊ 京都市の魅力である歴史・文化・芸術を最大限に活用し、人々の交流を通じて、新たなイノベーションを創出し、京都ブランドの付加価値を高める。そのためには、発展し続ける「しくみ」とそれを担う人材の集積と育成が鍵である。

《実態》

【京都市のものづくり】

- 製造業の事業所数、従業者数、製造品出荷額等は総体的に減少傾向
- 特に伝統産業における製造出荷額等が著しく減少
- 製造拠点の確保が困難（狭い土地、高い地価）
- 製造拠点（工場等）が海外や他府県へ流出
⇒ 『「量」から「質」へ産業の構造を転換させることが求められている』

【行政】

- 企業と行政のコミュニケーションが不足
- 文化、観光、産業、農林業、環境、都市づくりを総合的に行う視点が不足
- 文化、芸術、産業等をトータルにコーディネートする人材の発掘・育成が必要

《目標》

京都市の活性化

- ・ にぎわい、交流の機会の創出
- ・ 創造性豊かな人材や情報の集積から、新産業、新事業を創出し、付加価値の高いものづくりやサービスによる京都ブランドの向上

《京都の強み》

- ・ 山紫水明の自然や美しい町並み
- ・ 京都の歴史と伝統を彩る文化・芸術
- ・ 大学や研究機関の集積
- ・ 環境に対する意識の高い市民、企業
- ・ 京野菜や北山杉などブランド性の高い農林業

《主体》

- いちびり※コンソーシアム（市民・企業・NPO）
※ ここでは、広い視野や新たな発想を持ち、京都発の付加価値向上を創造し、応用できる人材を指す
- 既存の枠に捉われない行政組織

《方略》

1 創造的人材の集積

- ・ 国内外の分野を越えた交流、情報交換の核として、コーディネーター、データベース機能をもったコンソーシアムの創設

2 創造的人材の育成

- ・ 広い視野や新たな発想を持ち、京都発の付加価値向上を創造し、応用できる人材

3 交流によるイノベーションの創出

- ・ イノベーションを誘発し、マーケットベースに乗せるための支援を行う。

4 行政の支援体制の強化

- ・ 既存の枠にとらわれない独立実行部隊の創設（フレックス制、年俸制、民間企業との人事交流）

5 「創造都市（仮称）」の宣言

- ・ ユネスコのクリエイティブシティーズ・ネットワークへの加盟

6 伝統産業の活性化と伝統的な文化の保存・継承

- ・ 「和」を取り入れたライフスタイルの提案

7 観光客の誘致、シティセールス

- ・ 国際映画祭（例）の開催など魅力あるイベント開催、コンベンション誘致

8 人の交流による農林業の活性化

- ・ 学び・育ち・体験を通じた農林業の魅力向上

9 景観の保全と低炭素社会の実現による京都ブランドの向上

- ・ 景観の保全や元気な森づくり、京都版エコポイントの創設等

《方略の詳細》

【人々が交流し、創造する都市の形成による京都市の活性化】

京都市の魅力である地域資源を最大限に活用し、人々の交流から創造性溢れる都市の形成を図り、創造性豊かな人材や情報の集積から新たなイノベーションを誘発し、付加価値の高いものづくりやサービスにより京都市の活性化を目指す。

【背景】

グローバル化と地方分権化の進展、依然として続く財政難等を背景に、持続可能な地域再生に向けて、従来の開発型とは異なる発想の転換や新たな政策が求められている。

- 創造都市論
 - ・ チャールズ・ランドリー
 - ・ リチャード・フロリダ
 - ・ 佐々木雅幸
- 創造都市に向けた動き
 - ・ ニューヨーク
 - ・ ボローニャ
 - ・ 金沢
 - ・ 横浜

- 近畿経済産業局
 - ・ 関西文化産業戦略
 - (1) コンテンツ分野
 - (2) ライブエンターテインメント分野
 - (3) 食文化分野
 - (4) ファッション・デザイン分野
- ・ 「クリエイティブ・インダストリー・ショーケース in 関西」

【京都市の魅力】

- 山紫水明の自然や美しい町並み
⇒ 森林面積 61,018ha（市域の 74%）、歴史風土保存地域 14 地区（全国の 32%）
- 京都の歴史と伝統を彩る文化や芸術のまち
⇒ 市内の芸術系大学 10 校、市内の美術館数 36 館、世界遺産 14 件、国宝 211 件、重要文化財 1,826 件
華道・茶道の家元が多く、わが国固有の文化の発祥の地
- 知の創造拠点としての大学や研究機関の集積
⇒ 市内の大学・短大数 37 校、学生数 13 万 8817 人と 17 政令指定都市中 1 位（H19 学校基本調査より）
- 観光都市、宗教都市
⇒ 入洛観光客数（H19 年）4,944 万人、市内外国人観光客数 92 万人（H19 年）、国際コンベンション開催件数 183 件、東京に次ぐ 2 位（H19 年京都で開催の国際会議より）、約 2,000 の寺社仏閣

京都力

【京都産業の優位性】

- 伝統産業や先端産業、観光産業など京都らしい産業が集積
- 京セラや任天堂など世界的なシェアをもつ企業の立地
- 製造出荷額等が全国の市町村で 11 位（H19 年工業統計調査より）
- 製造業における粗付加価値額（※）は全国市町村で 7 位（H19 年工業統計調査より）
- 内陸都市（豊田市を除く）においては、製造出荷額・粗付加価値額ともに 1 位

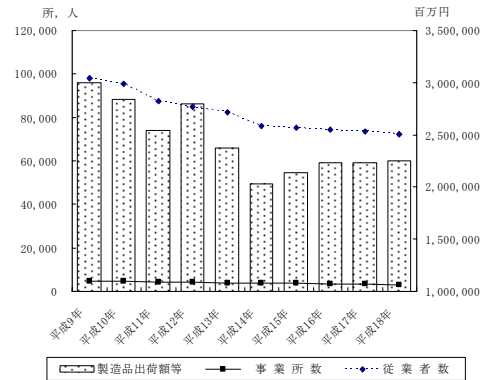


『付加価値※の高いものづくり』

※ 減価償却費を含む付加価値（生産活動によって新たに生み出される価値）の総額

【京都市のものづくりにおける現状と課題】

- 製造業の事業所数、従業者数、製造品出荷額等は総体的に減少傾向
- 特に伝統産業における製造出荷額等が著しく減少
- 全国市町村における製造出荷額等の順位は、16年9位、17年12位、18年15位、19年11位と推移
- 製造拠点の確保が困難（狭い土地、高い地価）
- 製造拠点（工場等）が海外や他府県へ流出



『「量」から「質」へ産業の構造を転換させることが求められる』

【行政の課題】

- 市内の大企業と行政の関係性が薄い
- 文化、観光、産業、農林業、環境、都市づくりを総合的に行う組織がない
- 文化、芸術、産業等をコーディネートする人材の育成が必要

など

【政策の視点】

京都の強みである豊かな地域資源を生かし、付加価値が高く、創造性豊かな産業やサービスを創出するため、文化、観光、産業、農林業、環境、都市づくりを総合的に推進し、京都市の活性化を図る。

クリエイティブ
シティ・京都

【目指す方向性】

- (1) 京都ブランド（都市の魅力）を高め、
- (2) 京都力（地域資源）を活用し、
- (3) 人々の交流を通じて創造性溢れる「都市」の形成を図り、新たなイノベーション（新産業）を創出し、
- (4) 付加価値の高いものづくりやサービスにより京都の活性化を目指す。

方 略

① 創造的人材の集積

国内外の分野を超えた交流、情報交換の核として、コンソーシアムを創設する。

(例えば)

- ・ 異業種交流会、業種間お見合いのコーディネーターやデータベース機能を持ったコンソーシアムの創設

② 創造的人材の育成

大学、企業、行政の連携により、広い視野、新たな発想を持ち、京都発の付加価値向上を創造し、応用できる人材を育成する。

(例えば)

- ・ 大学コンソーシアムを活用し、理工系の学部に創造力を養う芸術系カリキュラムを提供する。
- ・ アーティスト、クリエイターを支援するファンドを創設する。
- ・ 優れたアーティスト、クリエイターを発掘し、ビジネスにつなげる仕組み作りとそれをコーディネートする人材を養成する。

③ 交流によるイノベーションの創出

交流によりイノベーションを誘発し、マーケットベースに乗せるための支援を行う。

(例えば)

- ・ ブランド認証制度の創設
- ・ 財政支援
- ・ 行政による直接利用
- ・ 情報発信

④ 行政の支援体制の強化

(例えば)

- ・ 既存の枠に捉われない独立実行部隊の創設（フレックス制、年俸制、民間企業との人事交流等）

⑤ 「創造都市（仮称）」の宣言

- ・ ユネスコのクリエイティブシティーズ・ネットワークへの加盟を目指す。

⑥ 伝統産業の活性化と伝統的な文化の保存・継承

「守る」と「攻める」をキーワードに市民の生活様式に「和」を取り入れたライフスタイルを提案する。

(例えば)

- ・ 製品を身近に感じさせるために行う、「生活様式の提案」（生活に関わる製品を現代生活様式に合わせて提案）
- ・ 伝統産業の技術（漆、染など）とデザインのコラボレーションにより、若者に向けた新たな伝統産業製品を提案（学生を対象にしたデザインコンペの開催）

⑦ 観光客の誘致・シティーセールス

観光やシティーセールスの推進により京都市の魅力を高める。

(例えば)

- ・ 国際映画祭の開催など魅力あるイベントを開催し、海外のアーティストやクリエイターを誘致
- ・ コンベンション誘致強化、農林産品の情報発信 など

⑧ ひとの交流により農林業を活性化

学び・育ち・体験を通じて農業の魅力を高める。

(例えば)

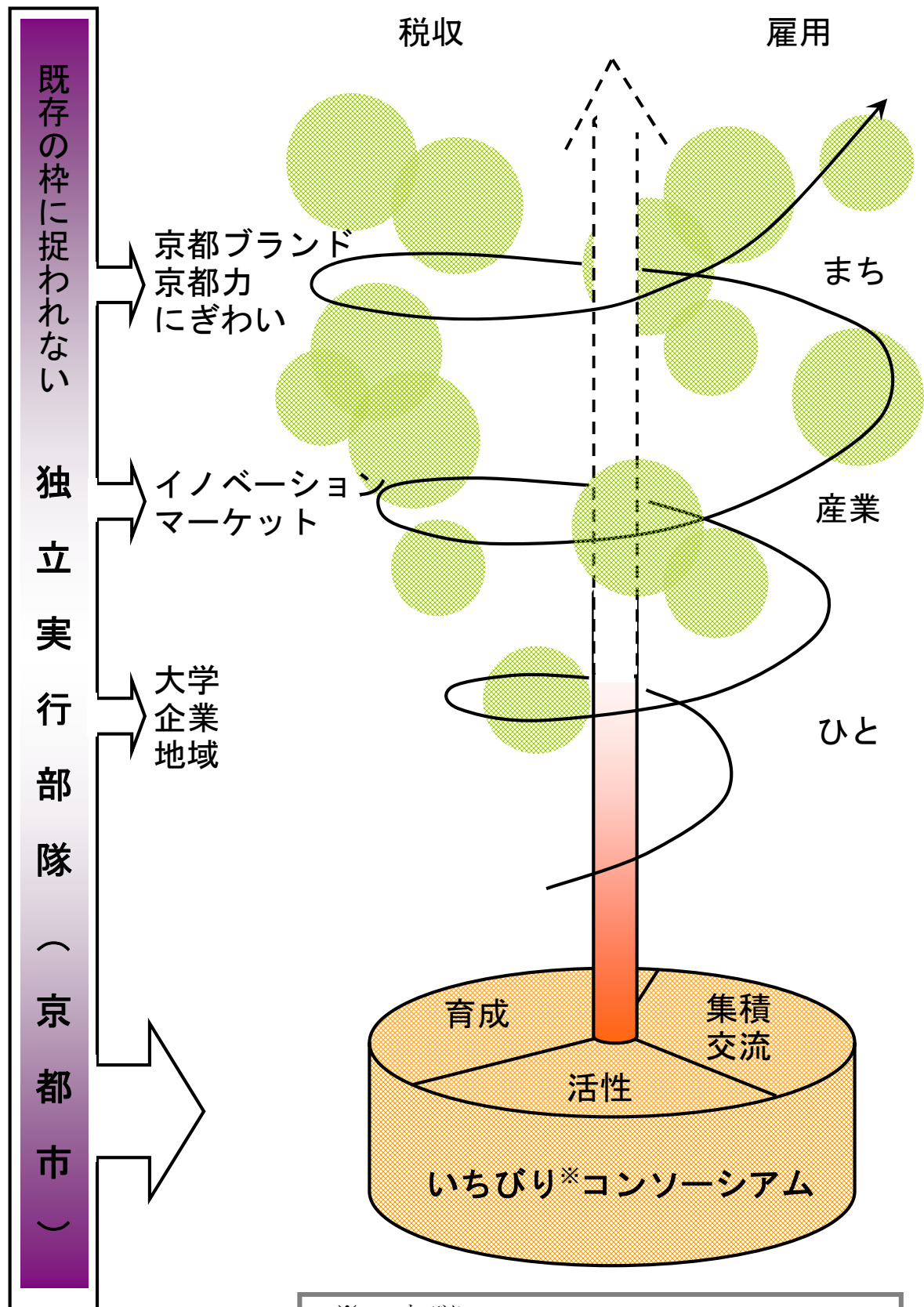
- ・ 首都圏や区役所に京野菜を使ったカフェ・レストラン等の開設による農林産物のブランド化

⑨ 景観の保全と低炭素社会の実現による付加価値の創出

(例えば)

- ・ 山紫水明の景観の保全や元気な森づくり
- ・ 京都版エコポイントの創設（トラフィカ京カードとの交換など）

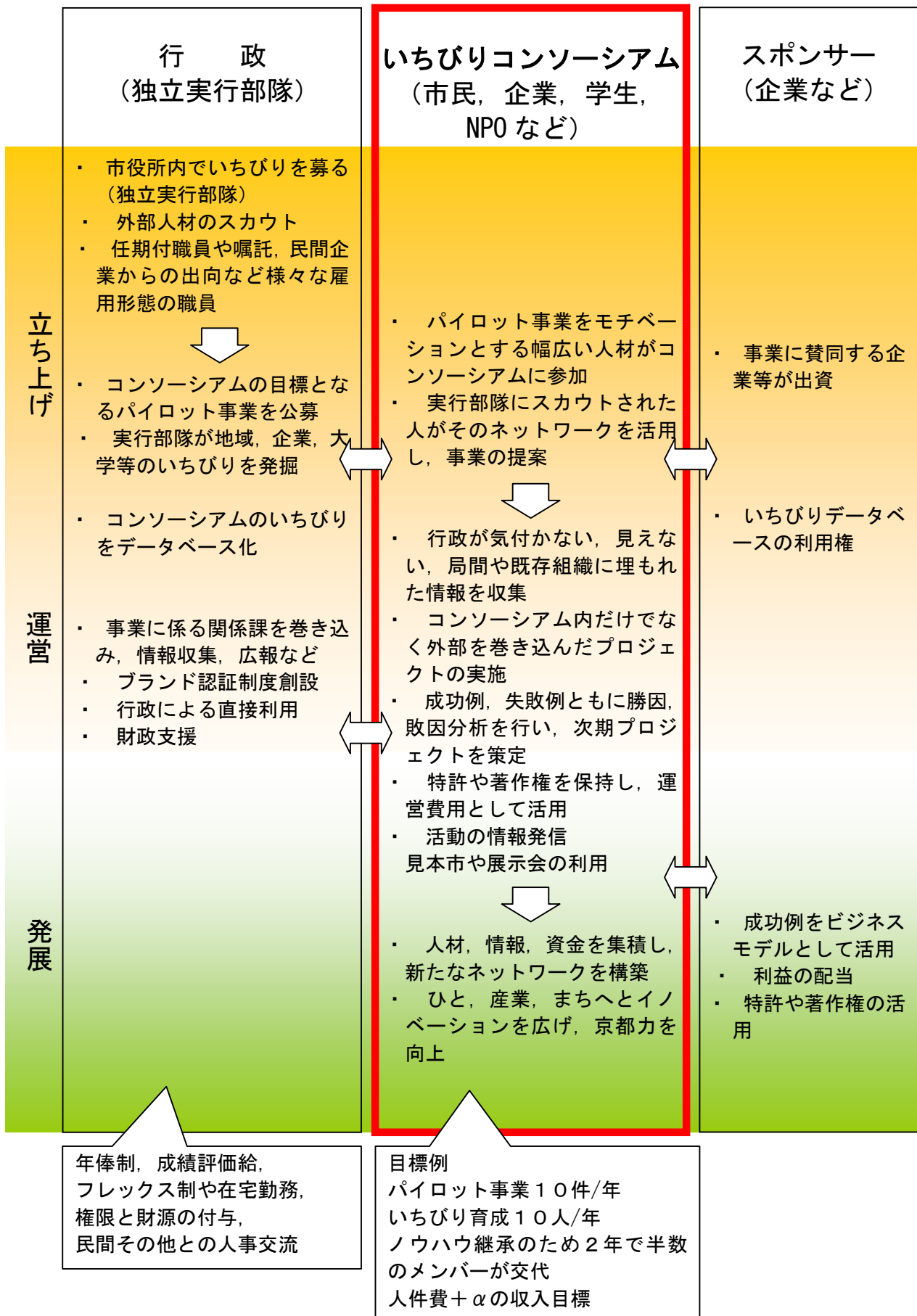
推進の主体と仕組み（概念図）



※ いちびり

ここでは、広い視野、新たな発想を持ち、京都発の付加価値向上のため創造・応用のできる人材を指す

いちびりコンソーシアムについて



2-4 重点戦略案と各種計画の関係

(1) 現行基本計画と重点戦略案の関係

重点戦略	
A	「人々が交流し、創造する都市の形成による京都市の活性化」
B	「京スタイル したはる？」
C	「広がる共助、変わる公助～ジリキが育てる心地いい京都流コミュニティ～」
D	「U24 を多世代交流の懸け橋に～ライフスタイルの仕組みづくり～」

第1章 安らぎのある暮らし

第1節 すべてのひとがいきいきとくらせるまち		↓重点戦略
1 ひとりひとりが個人として厚く尊重される	(1) 日々のくらしのなかに人権を大切にし、尊重し合う習慣が根付いた「人権文化」の構築 (2) 男女がともに自立、参画、創造する男女共同参画社会の実現・・・ (3) 子どもの人権の尊重 (4) 高齢者の人権の尊重 (5) 障害のあるひとの人権の尊重 (6) 特別施策としての同和対策事業の終結とその後の取組 (7) 多文化共生社会の実現 (8) 現代社会における多様な人権問題への対応	C, D
2 すべてのひとがいきいきと活動する	(1) だれもがずっとくらし続けたい・まちづくり・・・・・・ (2) 高齢者や障害のあるひとが積極的に社会参加できる機会の提供・・・ (3) 高齢者や障害のあるひとの能力向上や働く場の確保 (4) だれもがいきいきと働けるまちづくり・・・・・・	B C, D C,
3 子どもたちが心豊かで社会性を身につけみずからの生き方を学ぶ	(1) 学校と家庭・地域の連携・・・・・・ (2) 子どもたちの社会性を高める教育の推進・・・・・・ (3) 障害のある子どもの教育の推進 (4) 教職員の能力・意識の向上 (5) ゆとりと潤いのある学習環境づくり・・・・・・	C, D D D
第2節 ひとりひとりが支え、支えられるまち		
1 すべてのひとが相互に支え合い安心してくらす	(1) 住み慣れた地域のなかで支え合い安心してくらすしくみづくり・・・ (2) 高齢者とその家族の生活を支えるサービスの充実・・・・・・ (3) 障害のあるひととその家族を支えるサービスの充実・・・・・・	C C C
2 子どもを安心して産み育てる	(1) 母と子のいのち・健康を守る保健医療の充実 (2) 安心して子育てができる保育サービス等の提供・・・・・・ (3) 障害のある子どもや養護に欠ける子どもの子育て支援 (4) 子育ての支援を求める家庭への応援体制の構築・・・・・・ (5) 子どもたちがのびのびと健やかに成長できるしくみづくり・・・・	D D D D
3 心身ともに健やかにくらす	(1) 市民ひとりひとりの健康の増進 (2) 市民の健康をしっかりと守る取組の推進・・・・・・ (3) 保健医療サービスを支える体制の整備 (4) 精神保健・医療・福祉サービスを支える体制の整備 (5) 生活衛生の推進 (6) 保健医療施策の計画的な推進 (7) スポーツ活動の機会や施設に恵まれたまちづくり・・・・・・	C C
第3節 だれもが安心してくらすまち		
1 環境への負担の少ない持続可能なまちをつくる	(1) 「京のアジェンダ21 フォーラム」を核とした環境問題への取組・・・ (2) 環境と共生するくらしの実現・・・・・・ (3) 廃棄物を出さない循環型社会の構築・・・・・・	B B B

2 災害に強く、日々のくらしの場を安全にする	(1) 京都のまちの特色に配慮した災害に強いまちづくり (2) 災害から身を守る知恵や力をつける災害に強いひとづくり (3) 市民のくらしと豊かな文化・歴史の蓄積を守る災害に強い組織づくり	C
3 日常生活における身近な安全や安心を確保する	(1) 犯罪や事故のない安全なまちづくり..... (2) 消費者が自立し安心してらせるまちづくり	C
4 歩いて楽しいまちをつくる	(1) 歩く魅力のあるまちづくり..... (2) 歩くまちの歩行空間の形成と自転車利用の促進..... (3) 歩くまちを支える公共交通の充実..... (4) 歩くまちにふさわしい道路網の整備..... (5) 歩くまちをつくる新しい交通政策の推進.....	B B B B B

第2章 華やぎのあるまち

第1節 魅力あふれるまち		↓重点戦略
1 美しいまちをつくる	(1) 市民、事業者と一体となったまちの美化の推進..... (2) 個性的で美しい景観の形成..... (3) 水と緑を生かしたまちづくり (4) 木の文化が息づくまちづくり.....	B A, B B
2 成熟した文化が実現する	(1) 文化の創造・発信に向けた総合的な取組の推進..... (2) 市民文化の振興..... (3) 多彩な芸術文化交流の推進..... (4) 芸術文化の新たな担い手の育成..... (5) 豊かな文化資源を生かした芸術文化の振興..... (6) 文化財保護の推進 (7) 文化と観光・産業の連携.....	A A A A A A
3 国内外との多彩な交流を行う	(1) 多彩な国際交流の推進..... (2) 京都の特性を生かした国際協力の推進..... (3) 都市の活力を生む多様な交流の推進.....	A A A
4 生涯にわたってみずからを磨き高める	(1) 多彩な学習機会の確保・提供..... (2) 時代に応じた学習関連施設の充実..... (3) 新たな学習支援のしくみづくり..... (4) 世代を越えてともに学ぶ地域づくり.....	D D D C, D
第2節 活力あふれるまち		
1 産業連関都市として独自の産業システムをもつ	(1) 京都独自の新たな産業連関都市の構築..... (2) 活力ある産業活動への支援..... (3) 地域に密着した商業の振興 (4) 市民に身近で環境にやさしい都市農林業の育成.....	A A A
2 魅力ある観光を創造する	(1) 21世紀の京都を牽引する観光の創造..... (2) 観光情報の受発信と観光客誘致の強化..... (3) 海外からの観光客誘致の強化..... (4) コンベンション誘致の強化..... (5) 観光客を温かくもてなすしくみづくり..... (6) 京都をあげての観光振興の推進.....	A, B A A A A A
3 大学の集積・交流が新たな活力を生み出す	(1) 個性豊かな大学の集積を生かした交流の場づくり..... (2) 産学公の連携の推進..... (3) 地域に開かれた大学づくりの促進..... (4) 大学施設整備への支援 (5) 大学・学術研究機関の振興.....	A A A, D A
4 若者が集い能力を発揮する	(1) 産業や文化など若者の活躍の場づくり..... (2) 若者の活動拠点の整備と社会参加・自主的活動の支援.....	A, D C, D
第3節 市民のくらしとまちを支える基盤づくり		
1 個性と魅力あるまちづくり	(1) 保全・再生・創造を基調とするまちづくり..... (2) 多彩で個性的な機能をもつ地域のまちづくり (3) まちづくりを支えるしくみづくり	A, B

	2 多様な都市活動を支える交通基盤づくり	(1) 都市内の交通網の整備…………… (2) 都市圏内の交流を支える交通網の充実 (3) 広域交通網の充実 (4) 新しい交通政策の確立……………	B B
	3 高度情報通信社会に対応できる基盤づくり	(1) 高度情報通信社会に対応するための基盤整備 (2) デジタルアーカイブの推進 (3) 情報基盤を活用した企業活動の支援 (4) 観光における高度情報化の推進 (5) 高齢者や障害のあるひとへの高度情報化による支援 (6) 情報教育の充実 (7) 行政の高度情報化の推進	

第3章 市民との厚い信頼関係の構築をめざして

第1節	情報を市民と共有する	
第2節	市民の知恵や創造性を生かした政策を形成する	
第3節	市民とともに政策を実施する	
第4節	市民とともに政策の実施状況を評価して市政運営に生かす	
第5節	個性を生かした魅力ある地域づくりを進める	

(2) 主な分野別ビジョン・計画と重点戦略案の関係

区分・分野	区分	分野	A 各分野の根幹的なもの	B 各論の基本計画的なもの	C 各論の実施計画的なもの	分野横断的なもの
環境・市民生活	環境・消防・防災・生活安全・人権・国際化・しごと・くらし・青少年・スポーツ	●京都市地球温暖化対策計画(環境局)	●京都市循環型社会推進基本計画～京のごみ戦略 21～(環境局)	●京都市役所 CO2 削減アクションプラン(総合企画局)	●京の環境共生推進計画(環境局)	
		●京都市一般廃棄物(ごみ)処理基本構想(環境局)	○京都市地域新エネルギービジョン(環境局)	●新京都市産業廃棄物処理指導計画～京のさんばい戦略 21～		
		●京都市地域防災計画(消防局)	○京都市防災水利構想(消防局)	●京都市ダイオキシン類対策推進計画(環境局)	★京都市環境モデル都市行動計画	
		●京都市国民保護計画(消防局)	●京都市消防局震災消防水利整備計画(消防局)	○京都市自動車公害防止計画～ひととまちにやさしくるまエコプラン～(環境局)		
		●京都市人権文化推進計画(文化市民局)	●京都市生活安全基本計画(文化市民局)	○京都市動物愛護管理行動計画(保健福祉局)	★「木の文化を大切にす まち・京都」市民会議	
		●きょうと男女共同参画推進プラン(第3次京都市女性行動計画)(文化市民局)	●京都市消費生活基本計画(文化市民局)			
		○京都市ユースアクションプラン(第2次京都市青少年育成計画)(文化市民局)			○京(みやこ)の安心安全ネット総合プラン(総合企画局)	
		●新世紀「スポーツごころ」推進プラン(京都市市民スポーツ振興計画)(文化市民局)				
福祉・保健	高齢者福祉・障害者福祉・地域福祉・保健・医療	●第3期京都市市民長寿すこやかプラン(保健福祉局)	●京都市民健康づくりプラン(保健福祉局)	●第1期京都市障害福祉計画(保健福祉局)		
		●新・京都市障害者施策推進プラン(仮称)(保健福祉局)	●京(みやこ)・食育推進プラン(保健福祉局)			
		●京(みやこ)・地域福祉推進プラン(保健福祉局)				
		●支えあうまち・京(みやこ)のほほえみプラン(京都市障害保健福祉推進計画 2008-2012)(保健福祉局)				
文化・観光・産業	産業・観光・文化・高度情報化	○京都市スーパーテクノロジー構想(産業観光局)	○京都バイオシティ構想(産業観光局)		○大学のまち京都・学生のまち京都推進計画(総合企画局)	
		○おいでやす京の商い～京都市商業ビジョン 2004～(産業観光局)	●京都市伝統産業活性化推進計画(産業観光局)			
		○新京都市観光振興推進計画～ゆとり うるおい新おこしやすプラン 21～(産業観光局)	○京都市繊維産業ビジョン(産業観光局)		★「歩くまち・京都」総合交通戦略	
		●京都文化芸術都市創生計画(文化市民局)	○京都市産業科学技術振興計画(産業観光局)			
			○京都市中央卸売市場第一市場マスタープラン(産業観光局)		○京都市国際化推進プラン(総務局)	
都市整備・交通	土地利用・市街地整備・公園・緑地・都市緑化・住宅・住環境・交通・上下水道・河川	●京都市都市計画マスタープラン(都市計画局)	●京都市建築物耐震改修促進計画(都市計画局)	○京都市交通事業第2次アクションプログラム(交通局)	★京都市未来まちづくり100人委員会	
		●京都市景観計画(都市計画局)	●第8次京都市交通安全計画(文化市民局)	○京都市上下水道事業 中期経営プラン(2008-2012)(上下水道局)		
		●京都市緑の基本計画(建設局)	●京都市交通バリアフリー構想(都市計画局)	○京町家再生プラン(都市計画局)		
		●京都市住宅マスタープラン(都市計画局)	○「歩くまち・京都」交通まちづくりプラン(都市計画局)			
			○京都市交通事業ルネッサンスプラン(交通局)			
		○京都市水道マスタープラン(上下水道局)	●京都市自転車総合計画(建設局)			
		○京都市下水道マスタープラン(上下水道局)	○京(みやこ)の水ビジョン(上下水道局)			
教育・人づくり	子育て支援・学校教育・大学・生涯学習	●新「京(みやこ)・子どもいきいきプラン」(保健福祉局)		●新・京都市子ども読書活動推進計画(教育委員会)		
		○生涯学習新世紀プラン“新たな展開”(教育委員会)				
市民参加等	広域連携・市民参加・市政改革	○市民参加推進計画(総合企画局)	○京都市市政改革実行プラン(総務局)	○第2次京都市職員のメンタルヘルスケアプラン(総務局)		
			○京都市財政健全化プラン(理財局)	○京都市外郭団体改革計画(総務局)		

※ ●: 法律や条例等に基づく計画 ○: 法定以外の計画

☆印は検討中のもの

参考資料

参考資料1 市民聞きとりアンケートの概要

1 目 的

「10年後の京都像」をテーマとした市民意見の収集と市民対応能力の向上

2 実施日

平成20年9月24日、10月7日・14日の3日間

※ 合計で1,194名の市民と対話

3 実施者

公募職員から成る次期京都市基本計画策定支援チーム（30名）と新規採用職員（144名）

※ 9月24日 Aグループ（9班に分かれて行動）

※ 10月7日 Bグループ（9班に分かれて行動）

※ 10月14日 Cグループ（9班に分かれて行動）

4 内 容 アンケートの実施、集計、分析

市民関きりアンケート設問一覧

1 共通テーマ (1) 今の京都のまちをより良くしていくために一番何が大事だと思いますか？ (2) 京都市政に望むことは何ですか？

2 個別テーマ

	9月24日	10月7日	10月14日
いのち	1 子供の笑顔が見られる場所【3班】 ① あなたの周りに子どもの遊び場はありますか？ ② 子どもの遊び場は足りていると思いますか？ ③ 子どもと行く場所がよいですか？ ④ 安心して子育てするにはどのような施設が必要ですか？ 2 あなたの考える健康づくり【6班】 ① 健康診断を受けていますか？ ② 健康に関して何か気をつけていますか？ ③ 健康増進のためにどのような行政サポートを望まれますか？	1 高齢者が安心できる暮らし【9班】 ① 京都市の公共交通は高齢者にとって利用しやすいと思いますか？ ② お住まいの地域では、高齢者の方が安心して暮らせるような住環境の創出はありますか？ ③ 介護を必要とする高齢者の方が安心して暮らせる場所といえ、白毛と「施設」のどちらを思い浮かべますか？ 2 地域と子育て【1班】 ① 誰が子育ての中心になっていますか？ ② その方は、誰からサポートを受けていますか？ ③ 行政が行っている子育て支援事業を利用していますか？ ④ 子育てをするなかで一番の不安は何ですか？	1 安心して暮らせる明るく安全なまち【1班】 ① 京都市は、安心して暮らせるまちだと思いますか？ ② 今の暮らしで、生活の安全に関わり、安心できること・不安に思うことはありますか？ 2 いきいきとした長寿社会を目指すために【2班】 ① 身近な方に、介護保険のサービスを利用している人がいますか？ ② 京都市の福祉施策に満足していますか？ ③ 将来、一番不安に感じていることは何ですか？
	3 歩いたほうが楽しいまち京都【4班】 ① 今日こまで、どうやって来ましたが？ ② なぜ、それを選んだのですか？ ③ 京都市は歩くまちというまちづくりを目指していますが、どう思いますか？ 4 毎日快適にすごせる街【7班】 ① 京都市を歩いて不便や危険を感じることがありますか？ ② それはどんな点ですか？ ③ 安心して歩けるためには何が必要だと思いますか？	3 歩いて楽しいまち【4班】 ① 「歩いて楽しいまち」のイメージは？ ② 「歩いて楽しい」と感じる「まち」はどこですか？ ③ どれくらいの距離なら歩きたいですか？ 4 美しいまちづくりのためのマナー【2班】 ① たばこやごみのポイ捨てについて、注意したことがありますか？ ② 罰金を払う必要があると思いますか？ ③ 街頭にあるごみ箱を利用しますか？それとも持ち帰りますか？ ④ 美しいまちづくりのために、何か行動をされていますか？	3 住みよいまちづくりを目指して【3班】 ① 京都のまちの交通基盤は十分に整っていると思いますか？ ② 最も整っている・整っていないと思われる点はどこですか？ 4 環境にやさしいまちをつくるために【4班】 ① 京都市の環境について、不満に思うことはありますか？ ② 環境を守るためにどんなことをしていますか？ ③ 今後、更にどんなことをしたいですか？
知恵	5 世界一の観光都市を目指すために【2班】 ① 京都の観光客に魅力的な都市だと思いますか？ ② どの点がそう思うのですか？ ③ 現在、年々観光客数が増えていることはご存知ですか？ ④ 今後も観光客数を増やすために何が必要だと思いますか？ 6 地域のつながりを大切にしたい【8班】 ① ご近所の方とあいさつはされていますか？ ② あなたの地域では地域会や運動会など地域主催のイベントはありますか？参加していますか？ ③ より多くの人が参加してもらいたいのではないか？	5 地域と大学の関わり合い【3班】 ① 市民の何人に1人が大学生だと思いますか？ ② 普段、大学・短大と交流する機会がありますか？ ③ 地域のイベントや活動に学生が参加するとすれば、どのようなことをやってもいいですか？ 6 まちなかの景観政策【5班】 ① 京都らしいと感じる場所はどこですか？ ② 京都らしさが失われた、失われつつある場所はどこですか？ ③ 景観条例による規制は、必要だと思いますか？例日産に当てはめた場合、受け入れられますか？	5 伝統産業の活性化を目指して【5班】 ① 京都の伝統産業と聞けば、どのような産業を思い浮かべますか？ ② 京都では、華やかな「伝統産業の日」と定め、多彩なイベントを実施していますが、ご存知ですか？ 6 いつでも訪れたくなる「まち」を目指して【6班】 ① 今までのような観光地を訪れたことはありますか？ ② 京都では、観光客にとって、滞在できる都市だと思いますか？ ③ 今後、どのような施策が必要だと思いますか？
	7 あなたの理想の学校は？【9班】 ① ご自分の学生時代は楽しかったですか？ ② 今の学校は楽しそうですか？なぜそう思われますか？ ③ あなたの理想の学校は？ 8 スポーツで育むコミュニティ【1班】 ① スポーツに興味はありますか？(何かスポーツをしているか、どうすれば興味を持てそうか？) ② より多くの人が参加してもらいたいのではないか？	7 地域と市民協働【8班】 ① 地域のために何か活動されていることはありますか？ ② 1日30分の自由な時間があるなら、どんな活動をやりたいですか？ ③ 京都市と地域住民の皆さんの役割分担は、10年後、何割ぐらいにしたいですか？ 8 スポーツ環境【6班】 ① 定期的にスポーツをしたり、観戦したりしていますか？ ② 身近にスポーツをしたり、観戦する機会、施設はありますか？ ③ 京都市が企画するスポーツイベントに参加してみたいですか？	7 市民レベルでの国際交流を目指して【7班】 ① 今までの外国人と接する機会がありましたか？ ② 今後、外国人と接する機会が欲しいですか？ ③ 外国人と接する上で支障となることはありますか？ 8 市民ぐるみの人づくり【8班】 ① 子どもに関わる民間のボランティアに参加したことがありますか？ ② 今後、あなたはボランティアとして子どもに関わる取組に参加しようと思いますか？ ③ 学校や家庭だけでなく、市民みんなが子どもに関わっていくことは大切だと思いますか？
刷新	9 市政への市民参加【5班】 ① 市政への市民参加について、どうお考えですか？ ② そのような機会があった場合に参加したいですか？ ③ どのような内容の事業に参加したいですか？	9 市民の声の市政への反映について【7班】 ① 市政に関するご意見を市役所等へお届けたことはありますか？ ② その内容、手段は？	9 暮らしに役立つ広報について【9班】 ① 「市民しんぶん」(金市、区版)をご存知ですか、お手元に届いていますが、お読みになっていますか、どのような内容が役に立ちますか？ ② 市政に関するどのような情報をお知りになりたいですか？

Aグループ全体まとめ テーマ「住みやすい街作り＝観光客にやさしい街」

1. 共通テーマ

- ①今の京都のまちをより良くしていくために一番何が大事だと思いますか？
- ②京都市政に望むことは何ですか？

「交通網・道路の整備」、「景観の維持」、「地域とのつながり」など、これらの改善を望む声が多いことがわかった。

個別テーマ

2. 刷新

①市政への市民参加

多数の方が市民参加を必要と考えているが、その方法が少なく、メールでの参加など、参加しやすい環境を整えてほしいとの意見が多くあった。

3. 知恵

①世界一の観光都市を目指すために

京都市は魅力的な街だと思い、観光客にも好意的な考えの方も多数おられることで、今後は観光客とどのように共存していくかが課題だとわかった。

②地域のつながりを大切にしたいまちづくり
地域のつながりを必要だと分かっているが、自身の生活が優先され、参加に消極的になっている方が多いと分かった。
まず行政として、積極的な広報活動をする必要があると感じた。

3. 環境

①歩いた方が楽しいまち京都

②毎日快適にすごせる街

路上駐車、歩道への駐輪、喫煙マナーなどを改善し、安全で綺麗な街にするためには、一定の規制も必要だという意見が多数あった。

4. いのち

①子どもの笑顔が見られる場所

子どもの成長に合わせて、地域とのつながりを求めている母親が多いと感じた。

②あなたの考える健康づくり

健康ブームもあり、たくさんの方が健康に気を使っていると感じた。
健康は自身で守るものなので行政へは期待していない、それより、全市民に意識の向上を図る呼びかけなどをしてほしいという声が多く印象的であった。

5. ひと

①あなたの理想の学校は？

学校、親、地域のつながりを必要と考えている人は多いと分かった。
少人数制や京都ならではのカリキュラムを望む声もあった。

②スポーツで育むコミュニティ

大半の方がスポーツに興味を持っているが、時間・場所の問題で実際にはその半数ほどの方しかスポーツを楽しめていないと分かった。
身近な学校施設などの有効活用や広報活動の充実で、まだまだスポーツ人口を増やせると分かった。

- [illegible]

Bグループ全体まとめ

共通テーマ

- 京都のまちをよりよくしていくためには、景観に関する意見が最も多く、観光、行政運営、交通、マナーに関する意見が続く
 - ・ 景観については、景観形成について賛同する意見が多く、建物の高さの規制や町家を活かしたまちづくりを望む意見が多い
 - ・ 観光については、今後さらに推進していく意見が多く、行政運営については財政の健全運営を望む意見が多い
 - ・ 交通については、駐輪場の整備や公共交通の利便性向上、マナーに関しては自転車利用マナーや路上喫煙に対する意見が多く見られる
- 京都市政に望むこととして、医療福祉対策、行政効率化、都市環境改善、景観対策、不祥事撲滅、行政サービス向上、開かれた行政運営など、比較的多岐にわたる意見がみられる
 - ・ 医療福祉対策については、高齢者が暮らしやすい環境整備や施設の利用を望む意見が多いほか、都市環境改善では歩道の拡張やバリアフリー化など、歩道環境の改善を望む意見が多い
 - ・ 行政効率化に関しては、改善されてきているという意見もあるものの、さらなる向上を求める意見が多く、開かれた行政運営では、市民の意見把握を求める意見がみられる

個別テーマ

いのち

- 高齢者が安心できる暮らし
 - ・ 都市部だけでなく周辺部の駅について、エレベーター等の設置を望む意見がみられる
 - ・ 住民同士の助け合いはあるが、世代間のネットワークが希薄といった意見がみられる
- 地域と子育て
 - ・ 子育ての中心は母親が多く、祖父母からサポートを受けることが多い
 - ・ 子育ての不安として、保育所が少ない、地域に頼る人がいないといった意見がみられる

知恵

- 地域と大学の関わり合い
 - ・ 大学の役割として文化の発信や交流の促進への期待が多い
 - ・ 大学の講義やイベントの一般開放など、地域に開かれた大学を望む声が多い
- まちなかの景観政策
 - ・ 京都らしさを願う場所として、寺社・仏閣が多く、次いで社団、神社川となっている
 - ・ 景観条例の規制は必要という声（33名）が不要という声（3名）を大きく上回っている

刷新

- 市民の声の市政への反映について
 - ・ 意見を言ったことがある人は2割弱で、直接または投票によって意見を言っている
 - ・ 今後、ミーティングなどフェイスツフェイスなどの仕組みを充実することが求められる

環境

- 歩いて美しいまち
 - ・ 歩いて美しい道として、二条城周辺や寺町、三条商店街などの意見がみられる
 - ・ これからの道づくりとして、自然と歴史が調和した道、安心安全な道づくりが求められる
- 美しいまちづくりのためのマナー
 - ・ トラブルなどからポイ捨てを注意する人は少なく、罰則強化を求める声が多い
 - ・ ゴミを持ち帰る人は4割程度であるが、ゴミ箱は無い方がよいとする意見がみられる

ひと

- 地域と市民協働
 - ・ 地域活動の現状は、継続的又は単発的に活動している人と、活動できていない人に大別できる
 - ・ やってみたい地域活動としては、清掃・美化活動や芸術文化交流文化活動などの意見がある
- スポーツ環境
 - ・ 7割以上の人がスポーツをしており、施設利用しやすいことや低料金を望む声が多い
 - ・ 市有グラウンドの開放、小規模施設の分散配置、駅周辺への施設配置などの希望がみられる

Cグループ全体まとめ

共通テーマ

- 京都のまちをよりよくしていくためには、景観と交通に関する意見が多く、行政運営、観光、マナーに関する意見が続く
 - ・ 景観に関しては、良好な景観の保全や形成に対する肯定的な意見が多く、邸家の保全など京都らしいまちなみの保全・誘導を望む意見が多くみられる。
 - ・ 交通に関しては、バスの利便性向上に対する意見が多いほか、交通渋滞解消に向けた意見が多くみられる
 - ・ 行政運営に関しては、健全財政に向けた取り組みに対する意見がみられ、観光に関しては観光案内の充実、またマナーに関しては観光都市としてのマナーに関する意見もみられる
- 京都市政に望むこととして、行財政効率化、行政サービス向上、公共交通対策、不祥事撲滅が上位となっている
 - ・ 行財政効率化に関しては、税金の無駄遣いをしないようにとの意見が多く見られ、行政サービスの向上に関しては、窓口サービスの拡充を求める意見がみられる
 - ・ 公共交通対策に関しては、地下鉄、バスの運行本数の拡充を求める意見のほか、路線のわかりやすい行き先案内表示など、情報提供に関する意見がみられる
 - ・ 不祥事撲滅に関しては、今後、不正が無いようにとする意見が多くみられている

個別テーマ

いのち

- 安心して暮らせる明るい社会のために
 - ・ 「京都市は安心して暮らせるまちだ」と思う人が多い（YES：85%、NO：15%）
 - ・ 今の暮らしで不安に感じるのは、医療体制、自然災害、子供の安全を懸ける人が多い
- いきいきとした長寿社会を目指すために
 - ・ 福祉施策については、利用者負担が大きいことや行政のフォロー不足への不満がある
 - ・ 将来一番不安に感じるのは、年金や老後の生活を懸ける人が多い

知恵

- 伝統産業の活性化を目指して
 - ・ 京都の伝統産業を尋ねると、西陣織と答える方が多く、次いで清水焼、京友禅となっている
 - ・ 活性化に向けて必要なこととしては、PR、人材育成、教育・体験学習等の意見がある
- いつでも訪れたい「まち」を目指して
 - ・ 清水寺や嵐山等の著名な観光地へは、市民もきめ、ほとんどの人が訪れたことがある
 - ・ 10年後に必要な施策としては、公共交通網の充実、景観づくりという意見が多い

e環境

- 住みよいまちづくりを目指して
 - ・ 交通規制については、路線が整っていること等から十分に整っているとの意見が多い
 - ・ 十分に整っていない理由としては、バリアフリー対策が十分でないこと等の意見がある
- 環境にやさしいまちをつくるために
 - ・ 環境に対する不満としてタバコのポイ捨てや河川に不法投棄が多いこと等の意見がある
 - ・ 環境を守るための取組としては、節電やエコバックの持参、清掃活動等の意見がある

ひと

- 市民レベルでの国際交流を目指して
 - ・ 若い人ほど、外国人と接する機会を持っており、また、接する機会が欲しいと思っている
 - ・ 言葉や習慣の違いが支障となっており、必要な施策として外国語教育の充実等の意見がある
- 市民ぐるみの人づくり
 - ・ 子どもに関わるボランティアに参加したことがある方が半数以上を占めている
 - ・ 地域コミュニティの形成のためには、機会や施設の提供、学校等での教育などが考えられる

刷新

- 暮らしに役立つ広場について
 - ・ 市民新聞については多くの市民の方に読んで頂いている
 - ・ 行革・住しに関する情報が求められており、更なる内容の充実と読みやすさの向上を図る必要がある

参考資料2 次期京都市基本計画策定支援チームによる「プロジェクトベース」に基づく重点戦略の検討

① 「プロジェクトベース」について

次期京都市基本計画策定支援チームでは、市民聞きとりアンケート調査や職員自身の問題意識を踏まえ、未来の京都創造研究会に提案する検討素材（取組方策メニュー）を取りまとめた。

取りまとめるにあたって、まず、支援チームの全体会議において、検討の方法論を身につけるため、「プロジェクトベース」の考え方について大山委員よりレクチャーを受け、これを踏まえて各チームごとに検討の基本的な方向付けを議論した。

「プロジェクトベース」の概要

領域別の課題設定による課題解決ではなく、複数領域にわたる具体的な課題を設定し、目標達成に向けた取組の課程で直面するさまざまな問題（課題）の解決を図っていくという方法論として整理される。特に教育分野では、「プロジェクトベース学習法」として、生徒自らの興味・関心、問題意識に沿ってプロジェクトを立ち上げ、課題追求を行う学習スタイルとしてアメリカで開発され、我が国にも導入が試みられている。

次期京都市基本計画策定支援チーム第2回全体会議資料（平成20年11月14日）

Project-based という考え方 大山泰宏（京都大学教育学研究科）

次のような課題をどのように解決？

- ・M県は保守王国として、県庁では長い間、談合と裏金をはびこっている
- ・観光が唯一の資源でありながら、観光客数は低下する一方である
- ・良質な農産物を生産しながら、市場ではブランドイメージがいまひとつで、評価されない
- ・これまでは・・・
 - 各領域別に課題を設定し解決しようとしていた
- ⇒ **Project-based の手法**：複数領域に関わる具体的課題を設定し、その実現を進めていく過程で直面する、さまざまな問題（課題）の解決を図っていく

教育分野での project-based

- ・PBL：Project (Problem) -based Learning
 - 専門家、実務家の教育に関わる
- ・医学、看護学、経営学、教育学、法学、工学など
 - 多くの要因が複雑にからみあっている実践領域
- ・部分（各領域）の積み重ねが必ずしも全体にならないような分野において有効な方法
- ⇒ これまでの教育
 - 領域区分された知識を学び（基礎）、それを統合（応用）する
 - 何のための知識か、何のためのスキルかが見えず、学習は断片的で動機付けも低かった

大学教育での Project-based の例

- ・ロボットコンテスト
 - ある目的遂行のためのロボットを作ることを通して、各領域の知識が統合される

- 目標が具体的でわかりやすい
- ・Portland State University の大学改革
 - University Studies という、総合的科目を糸口にした、カリキュラム、学生支援、教員意識改革
 - 学生の研究課題の例： コロンビア川に関するプロジェクト
- ・環境問題、文学、経済学などとの関わり
- ・グループ作業のサポートを通して学生支援と結合
- ・大学と企業とのつながり、人脈の形成 などの副次的効果

Project-based にふさわしい課題の特徴

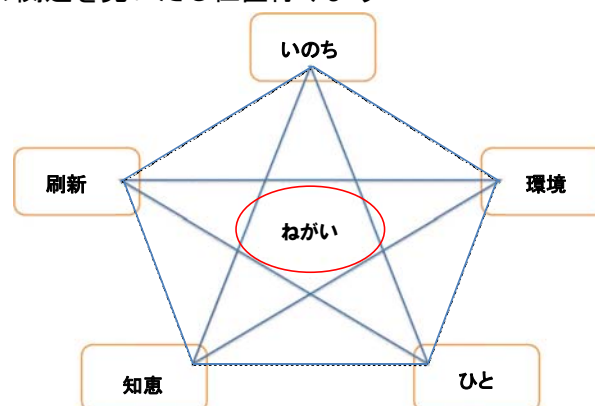
- ・シンボル性が高い
 - 多くの立場の人々から理解され共感を得る
 - 課題に関わる人々に所属意識とコミットメントが生まれる
- ・複数の課題領域の解決に結びつく
 - 結果の安定性が高くなるとともに、相乗効果が期待できる
- ・人間の心理や行動への理解にもとづく
 - 人間がどのような心理的・行動的パターンを持っているか
- ・組織図上の関係ばかりではなく、実際の結びつきも考慮する
 - 生活者は、組織図のような結びつきの中には生きていない

グループワークのためのヒント

1. それぞれの立場から見えてくる問題を特定しよう
 - 各々の Stakeholder の尊重
 - 市民アンケートの結果 + 市職員が見た世界
2. 各問題を、5本柱「いのち」「環境」「ひと」「知恵」「刷新」のカテゴリーに分類しよう
 - 類似の問題をまとめ「課題」にまとめていこう。
 - ただし、抽象化しすぎて迫力や実感を失わないように！
3. まとめられた課題に関して以下の観点を明らかにしよう

- ・実態： 実態はどうなっているの？（何が問題か?）
- ・目標： 目標は何？（どうなったらいいの?）
- ・条件： 条件や潜在的資源は？（制約は？ 使えるものは?）
- ・主体： 誰に（が）関わる？（部署、市民、企業・・・）
- ・方略： どうやって？（何をしたらいい?）⇒ 政策へ

4. 5本柱の他のものとの関連を見だし位置付けよう



② 検討成果

その後、職員による検討が重ねられ、具体的には下記に示す15項目からなる「取組方策メニュー」がとりまとめられ、第3回研究会に報告されるとともに、引き続き第1回都市部会及び第1回生活・地域部会においては、重点戦略の本格的な検討着手の素材とされた。

これらを素材として、部会の具体的な活動単位である4つのユニットにおいて取組の方向性が練り上げられ、最終的な重点戦略案に活かされている。

次期京都市基本計画策定支援チーム

～ Project-basedで考えました。 これから皆でブラッシュアップ ～

～ 地域・生活 ～

- ・ 地域ぐるみで、楽しく！子育て
- ・ 地域コミュニティ活性化と子育て・高齢者支援ビジネスの展開
- ・ ウエルカム・レター～地域に溶け込むきっかけづくり～
- ・ 若者や学生が働きたい・住みたいまち京都
- ・ 市民が育み、市民を育む京都 ～京育～

～ 都 市 ～

- ・ 住みやすいまちづくり＝観光客にやさしいまち
- ・ 京都景観のブランディング戦略 ～規制から創造・共有へ～
- ・ 早く、安く、便利で環境にやさしい京都の公共交通～人が主役の公共交通優先のまちづくり～
- ・ 市民、観光客、京都に関わるすべての人によるシンボルロードづくり
～新たな魅力創出と地域力の向上を目指し、“みち”という場の活用～
- ・ 京（みやこ）自転車推進プラン
- ・ 祇園祭ごみゼロプロジェクトー環境意識の啓発と京都のイメージアップ戦略
- ・ 「京もの」ある暮らし～伝統産業の活性化の推進～
- ・ 市民も企業、観光客も皆が共有できる京都ブランドを育てる
- ・ 着付け、京料理など、楽しめる庁舎の創造
- ・ 世界最先端の観光都市京都ー5000万人構想に引き続く新しい観光戦略の構想